



Integrated Research in the Bishri Mountains on the Middle Euphrates

セム系部族社会の形成



文部科学省科学研究費補助金
「特定領域研究」
Newsletter No. 8

2007年11月号



はじめに

平成19年11月現在、ガーネムアリ遺跡の発掘および同遺跡と周辺地域の地質調査の2つを柱とする第4次現地調査がおこなわれています。

このような中、ニューズレター本号は5編の論考で構成され、その多くが第3次、第4次現地調査の成果の速報です。

桂田祐介氏の「ビシュリ山地北部およびユーフラテス河中流域周辺の地質環境」はガーネムアリ遺跡、ハマディーン遺跡、そして、ビシュリ山地北部からユーフラテス河右岸までの岩石と堆積物に関する現地調査の速報です。第4次現地調査の一角をなすガーネムアリ遺跡周辺地域の地質調査に参加された同氏は、現地調査に先だって衛星リモートセンシング画像から地質情報の特徴を推測され、この推測にもとづいて現地の岩石に関する調査をおこないました。

深見奈緒子氏の「ラッカ - ジャズィーラ地方の拠点」は、同氏が本年8月の第3次現地調査で実施したラッカ市周辺の調査の成果を含んでいます。ビシュリ山の北方に近接するラッカ市の歴史、特にイスラーム時代の歴史が、建築遺構の紹介を通して明解に記述されています。

宮下佐江子氏の「パルミラのテッセラについて」は、ビシュリ山の南方に位置するオアシス都市パルミラで出土したテッセラ（粘土製小形札）の紹介です。同氏はこれらの資料を用いて古代都市パルミラの社会生活の解明を試みています。

後藤智哉、長谷川均の両氏は第3次現地調査に参加し、調査許可地域内のテル型遺跡の分布を調査しました。そして、ユーフラテス河氾濫原とその周辺で都合13の遺跡を確認しました。両氏による「ソビエト軍製地形図を利用したテルの分布調査」はこの分布調査の成果報告です。

そして、高濱秀氏の「西アジアにおける初期騎馬遊牧民関係の遺跡を訪ねて」は、第3次現地調査の一環としておこなわれたイラン、トルコ、シリアの遊牧民関係遺跡の実見調査の報告です。スキタイが活動した地の遺構を実見調査することで有益な知見を得られたことが述べられています。

以上のように本号は現地調査の成果を多く掲載しています。調査・研究成果の速報というニューズレターの重要な役割を果たしています。

平成19年11月20日
領域代表者 大沼克彦

目次

ビシュリ山地北部およびユーフラテス河中流域周辺の地質環境: ASTER画像による地質判読と2007年度現地調査の速報	桂田 祐介	1
ラッカ ジャズィーラ地方の拠点	深見奈緒子	5
パルミラのテッセラについて	宮下佐江子	13
ソビエト軍製地形図を利用したテルの分布調査 - シリア・ユーフラテス河中流域を対象として -	後藤 智哉 長谷川 均	16
西アジアにおける初期騎馬遊牧民関係の遺跡を訪ねて	高濱 秀	20

表紙

A
B | C

A: アッバース朝時代のラッカの市壁

B: アッバース朝時代のアル・ラーフィカの大モスク（ラッカ市）

C: アッバース朝宮殿（ラッカ市）

ビシュリ山地北部およびユーフラテス河中流域周辺の地質環境: ASTER画像による地質判読と2007年度現地調査の速報

桂田祐介 (名古屋大学博物館)

計画研究「環境地質学、環境化学、14C年代測定にもとづくユーフラテス河中流域の環境変遷史」研究協力者

1. はじめに

西アジアの遺跡の多くが分布する乾燥・半乾燥地帯では、その植生被覆の乏しさから地表面の露出がきわめて良好である。そのため、当時の人々の生活圏に存在し、なんらかの関わりがあったであろう地質条件や、河川の氾濫等の当時の人々の生活に直接影響したイベントの痕跡について、リモートセンシング技術を用いて判読できる可能性がある。これまで、地質情報を対象にしたリモートセンシング技術の利用は、そのほとんどが資源探査か防災目的のモニタリングに限られてきたが、乾燥気候条件下における地形発達およびその地形を特徴づける地質条件の分析を通して、地質時代から先史時代を経て現在に至る環境変遷史の構築に貢献できる可能性がある。

本調査では、現地調査前に衛星リモートセンシング画像から地質情報の特徴を推測し、その結果をもとに現地の岩石に関する調査を実施した。本報告は、そのリモートセンシング画像の解析による判読例および、本年度より発掘調査の開始されたガーネム・アリ遺跡、発掘の許可を得ているテル・ハマディーン遺跡、および、ビシュリ山地北部からユーフラテス河右岸までの地域の岩石と堆積物を現地で調査した結果の速報である。

2. 地質概要

遺跡周辺の地質は、第三紀中新世の堆積岩類を基盤とし、この上に第四紀の河岸段丘が発達している。第三紀の堆積岩類は層厚5~7mの複数の石膏層を特徴とし、砂岩および泥岩をはさんで北東に4-8度の傾斜で成層している。河岸段丘は低位・中位・高位の3層があり、ガーネム・アリ、テル・ハマディーンの2遺跡はいずれも低位段丘に位置している(Hoshino et al., 2007)。

調査地周辺の地質図は図1に示すとおりで、遺跡のあるユーフラテス河の氾濫原から、南のビシュリ山地にかけて第四紀~新第三紀鮮新世~中新世と、順に古い時代の堆積岩に移りかわり、ビシュリ山地には古第三紀始新世、漸新世の堆積岩類と一部白亜紀後期の堆積岩類が露出している。また、基盤であるこれらの第

三紀の堆積岩類の上には、とくにビシュリ山地の斜面の一部で、第四紀の風成層やマスムーブメントによる岩屑の移動体と考えられる堆積物が分布しているほか、周辺には第四紀の火山岩が緩やかな台地を形成している。

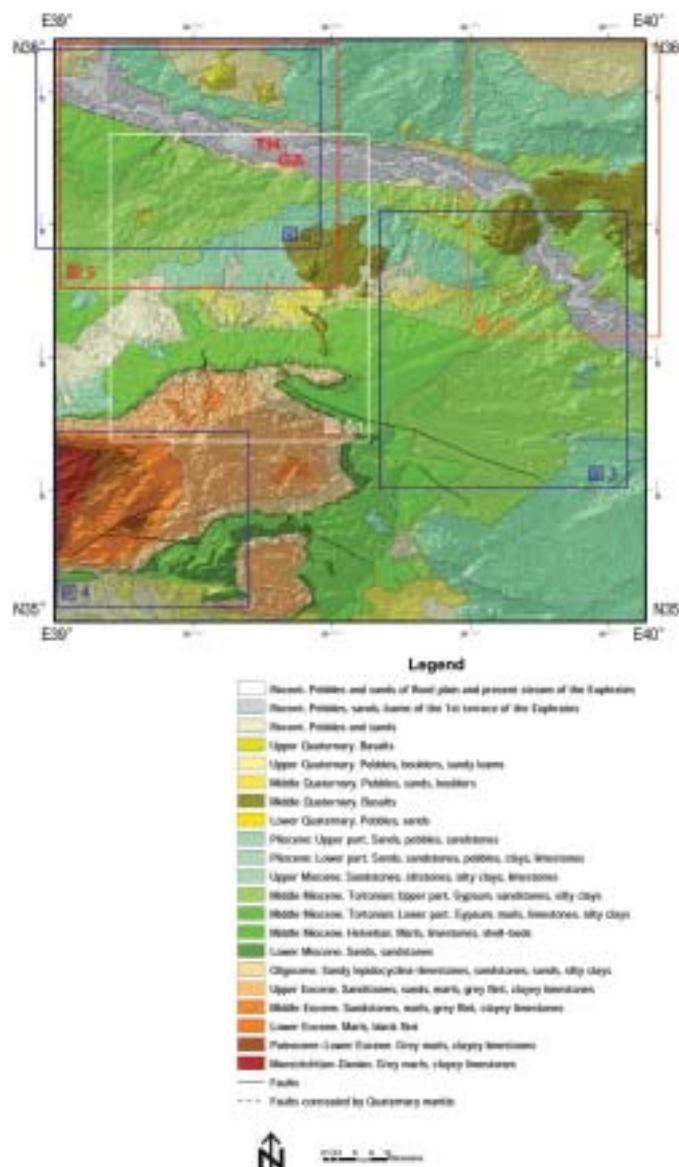


図1 調査地周辺の地質概略図
SRTM-3によるDEM陰影図上に、Geological Map of Syria 1-37-XXII (Ministry of Industry, S.A.R.,1964)の地質区分を重ねて作成。赤文字で示すのは、ガーネム・アリおよびテル・ハマディーンの2遺跡の位置で、矩形は図2~6の位置。

3. 方法

現地調査に先駆けて、衛星リモートセンシング画像を用いて6地域の地質情報の判読を試みた。

使用したリモートセンシングデータは、Advanced Spaceborne Thermal Emission and Reflection radiometer (ASTER)の可視近赤外(VNIR)、短波長赤外(SWIR)、熱赤外(TIR)のそれぞれの波長帯で、2004年8月、2005年5月、2005年7月に撮影されたものである。含水ケイ酸塩鉱物、炭酸塩鉱物、硫酸塩鉱物といった鉱物の多くは、特徴的な反射/放射スペクトルの形状を示すことから、ASTERの各センサーはその特徴を反映して設計されている(Yamaguchi et al., 1998)。

本報告の判読では、Rowan and Mars (2003)がアメリカ合衆国カリフォルニア州南部を対象にして造岩鉱物の微小な差異を抽出した研究や、Kavak(2005)がトルコ中央部の第三紀層を対象にして行った石膏層の分布調査などの先行研究によって示されている、岩石・鉱物指標になりうるバンド間演算を参考にして画像処理を行った。現地調査は2007年11月7日から13日の約1週間に実施した。現地調査では、これらの判読範囲のうち、位置の特定が可能であった地点において岩石のサンプリングと露頭での観察を行った。採取した岩石サンプルの一部は帰国後にさらに分析して確認する予定である。

4. 結果

リモートセンシングによる判読例と現地で確認した岩石類などを以下に示す。

4.1 ユーフラテス河の河岸段丘(第四紀堆積層)

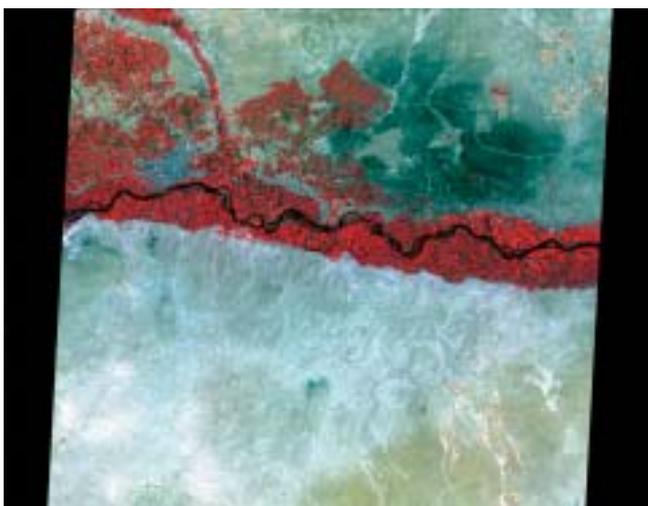


図2 遺跡を含む付近のフォールス・カラー画像 VNIR(R,G,B=3n,2,1)。緑色植物の存在を示す赤い部分はユーフラテス河の氾濫原にほぼ限定されている。赤で示される部分は大半が農作地か氾濫原の葎の植生だと考えられる。このほか、ラッカ市街、ユーフラテス川左岸の玄武岩、現在のユーフラテス川の河道と三日月湖が確認できる。



写真1 遺跡の位置する1段目の耕作地より南方(右岸側)には、より上位の段丘面と第三紀の堆積岩類の平坦面が確認できる。

4.2 中期中新世の石膏層

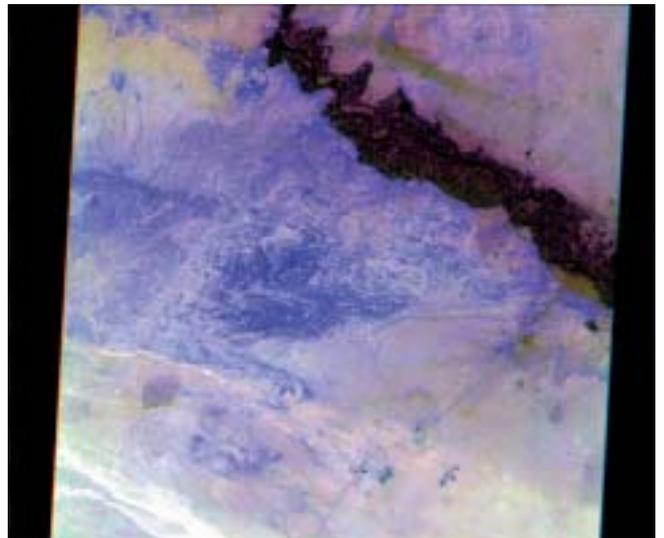


図3 SWIR(R,G,B=6,5,4)で存在が示唆される石膏と考えられる鉱物(青色)



写真2 中新世の地層には層厚5~7mの石膏層が複数分布する。より薄いものも含めれば、石膏は中新世のみでなく、第四紀の地層まで広く見られる。石膏層では、針状または板状の単結晶が観察でき、この地域が中新世以降極端な乾燥条件下にあったと予想できる。

4.3 始新世の堆積岩類

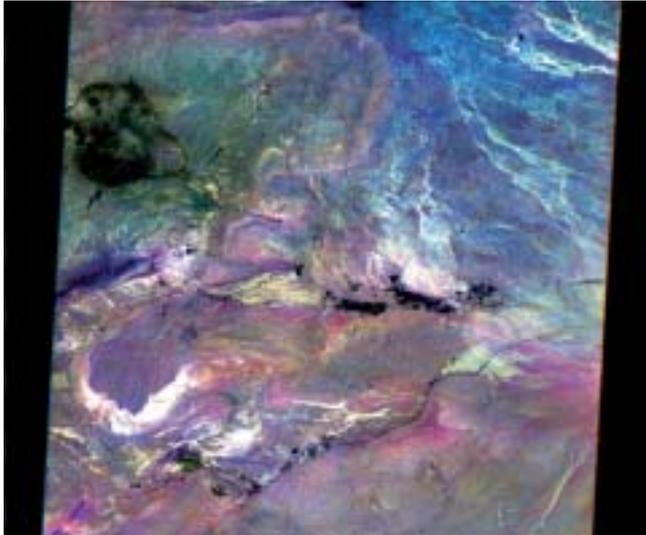


図4 SWIR(R,G,B=7,8,9)で存在が示唆される鉱物色の分布域の違いは、石灰岩と石膏の可能性が考えられるが、現地での観察によるとアスファルトや凝灰岩の分布を反映している可能性も考えられる。



写真3 ビシュリ山地の中腹に広く分布する始新世の堆積岩の中には天然アスファルトの地層が存在し、一部は露天掘りで大規模な採掘が行われている。周辺には石油採掘施設が点在しているが、アスファルトとの関連は不明。



写真4 始新世とされる堆積岩の分布域に位置するビール・スパイでは、凝灰岩層と凝灰岩起源と考えられるフリント層が特徴的で、BC6000年頃の石器が多数見つかった。

4.4 遺跡周辺の石膏層

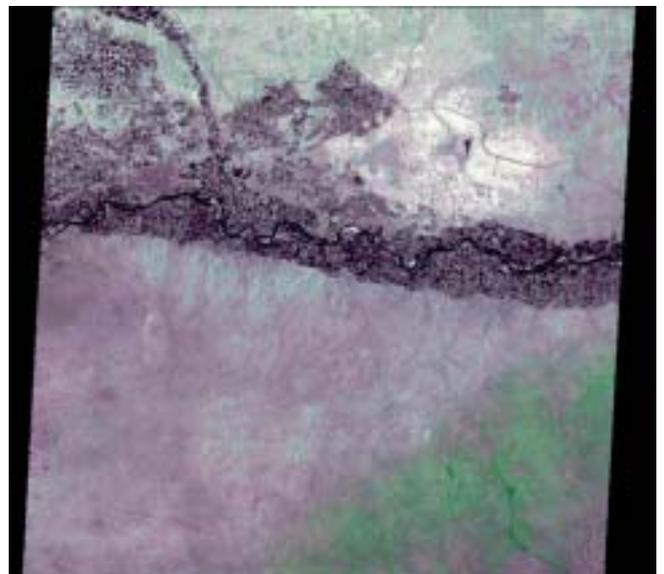
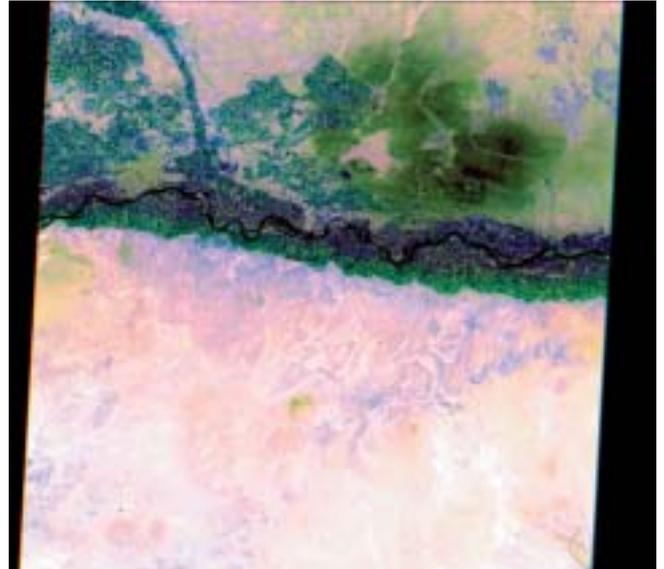


図5 上はSWIR(R,G,B=6,5,4)によって青く強調される鉱物の分布。下はTIR(R,G,B=11,10,12)によって石膏の抽出(赤)を試みたもの。いずれも写真2と同様の中期中新世の堆積岩で、厚い石膏層を特徴とする。



写真5 三日月湖の南側に位置する石膏の露頭

4.5 珪酸塩鉱物

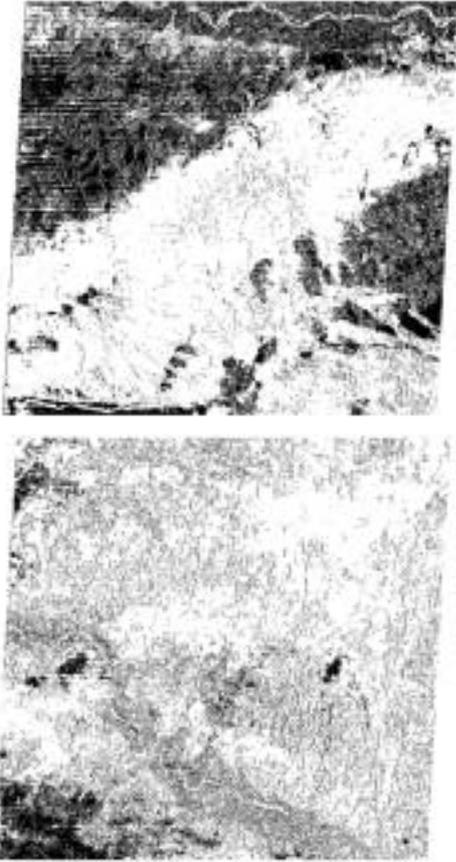


図6 ケイ酸塩鉱物は岩石組成(SiO_2)と熱赤外域の放射率との対応が良好であることから、ASTER(TIR)によって微細な差を検出できる。バンド10~13によるログレジデュアル計算によって得られるケイ酸塩鉱物の存在を抽出した画像。玄武岩が白く抜けていることや、第三紀の堆積岩でも濃度が異なる事が推察できる。



写真6 ガーナム・アリ遺跡から南方に約20kmの地点に位置する玄武岩の露頭
Ministry of Industry, S. A. R. (1964)の地質図によると広く玄武岩が分布していることになっているが、実際は非常に狭い範囲に限られて分布しており、ASTERによる予測に近い。

5 . おわりに

本調査報告は、計画研究「環境地質学、環境化学、14C年代測定にもとづくユーフラテス河中流域の環境変遷史」の代表(星野) 分担者(田中、中村、吉田、束田)、協力者(斉藤、桂田)の全てのメンバーによって、

2007年11月に行った現地調査の前半の期間に実施した内容の一部である。本調査チームでは、このほかに河岸段丘、石膏層ほか地層内の二次生成物等に関する調査を行い、後半には星野・束田の2名により玄武岩をはじめとする周辺地域の地質調査を実施する。

河岸段丘の判読については、ASTERの3n、3bバンドによるステレオ視でも困難であった。5000分の1地形図からの判読が現時点で最も効率の良い手段だと考えられる。実際、今回の現地調査ではユーフラテス川右岸の河岸段丘が4面から成る事を確認し、2つの面から炭質物を採取した。

本調査では、Ministry of Industry, S. A. R. (1964)の地質図を参考にしたが、一部現在観察される地質・衛星画像によって判断される地質と異なる箇所がある。新第三紀以降の乾燥環境のみならず、今後、発掘がすすむにつれて遺跡との関連が示されるかもしれない玄武岩やアスファルト、フリントの分布についてもより詳細に特定する必要がある。

次年度以降は、本調査結果をもとに、地上での分光反射特性の測定を行って詳細を決める計画である。

文献

Hoshino M., Tanaka T., Nakamura T., 2007. Geological and environmental field survey in the Bishri region, southeast of Raqqa - A preliminary report of the first working season -. 特定領域研究「セム系部族社会の形成」平成18年度成果報告書。

桂田祐介, 2007. ASTER画像を用いて判読するシリア東部ビシュリ山地北部の遺跡とその周辺の地質環境. 日本地質学会第114年学術大会(札幌)講演要旨。

Kavak K.S., 2005. Recognition of gypsum geohorizons in the Sivas Basin (Turkey) using ASTER and Landsat ETM+ images. International Journal of Remote Sensing, 26 (20), 4583-4596.

Ministry of Industry, S. A. R., 1964. Geological Map of Syria I-37-XXII.

Rowan L.C., Mars J.C., 2003. Lithologic mapping in the Mountain Pass, California area using Advanced Spaceborne Thermal Emission and Reflection Radiometer (ASTER) data. Remote Sensing of Environment, 84, 350 - 366.

Yamaguchi Y., Kahle A. B., Tsu H., Kawakami T., Pniel M., 1998. Overview of Advanced Spaceborne Thermal Emission and Reflection radiometer (ASTER). IEEE Transactions on Geoscience and Remote Sensing, 36 (4), 1062 - 1071.

ラッカ ジャズィーラ地方の拠点

深見奈緒子（国士舘大学イラク古代文化研究所・共同研究員）

計画研究「古代西アジア建築における組積技術の形態と系譜に関する研究」研究分担者

はじめに

テル・アル・ガーネム・アリー発掘隊の拠点となったラッカ市は、8世紀後半にさかのぼるアッバース朝時代の市壁（写真1）がよく残る稀有な都市である（図1）。アッバース朝期を中心として、ラッカに現存する建築遺構を周囲の実例を比較することによって、当時の都市と建築の歴史を紐解いてみたい。

1. イスラーム以前のカリニコス

ラッカは、ユーフラテス川中流域のジャズィーラ地方において、重要な位置を占めていた。アレppoからドゥラ・エウロposを経てメソポタミアをつなぐ東西の幹線と、ダマスカスからパルミラを経て、ウルファをつなぐ南北の幹線の交点に当たる。くわえて、アナトリアから南下するバリーク川が、南東へ下るユーフラテスへ注ぐ地点に当たる。

この周辺を中心地として、テル・ピアアの南、ユーフラテス川との間に、古くはヘレニズムの時代からニケフォリウム（Nicephorium）カリニクムあるいはカリニコス（CallinicumあるいはKallinikos）、レオントポリス（Leontopolis）などと呼ばれる町が作られた。この町の位置は、テル・ピアアの1キロメートル南、市壁の残るアッバース朝の囲壁都市の600メートル東側に当たる。

ニケフォリウムの名はセレウコスのニカトール（BC301 - 281年在位）に、カリニクムあるいはカリニコスの名は、セレウコス朝のカリニコス（BC246 - 226年在位）に、レオントポリスの名は、東ローマ皇帝レオ1世（457 - 474年在位）にちなみ、それぞれの君主が町を建設した様相を伝える。

ビザンツ時代、カリニコスは対サーサーン朝の前線城塞であった。6世紀には、カリニコスはシリア正教修道院のある町としても名高い。テル・ピアアには、聖ザッカー修道院が発掘され、床モザイクから509年の日付が発見された。531年にサーサーン朝ペルシアのホスロー1世（531 - 579年在位）の侵入を受け破壊されるが、すぐに東ローマ皇帝ユスティニアヌス1世（527 - 565年在位）によって再建された。彼は、地中海世界に勢力を広げ、コンスタンティノーブルにハギア・ソフィア大聖堂を再建したことで知られる。



写真1 ラッカの市壁

2. ウマイヤ朝期のジャズィーラ地方

イスラーム暦18年にあたる西暦639年には、アラブ族のイヤード・イブン・ガナム（‘Iyad ibn Ghanm）によってキリスト教徒たちの住む町カリニコスが平和裏に征服され、イスラーム教徒たちもこの町に共存するようになったらしい。このころから、カリニコスという名に加えアラビア語の記述にラッカ（al-Raqqa）の名が記されるようになる。マイネッケによれば、当時の町は、先述したカリニコスにあたり。その大きさは東西1.5キロメートル南北700メートル余りの細長い都市で市壁に囲まれていた。

その町のほぼ中央に、イスラーム教徒のための礼拝の場たるモスクが、続く支配者サイド・イブン・アーミル・ヒジャームによって作られた。現状ではなにも残っていないが、20世紀初頭のヘルツフェルトの記述によれば、73メートルかける108メートルの規模であったという。10世紀に四角形断面のミナレットが中庭の内側に付加され、20世紀初頭に撮影された写真が残っている。

続く、ウマイヤ朝期には、この地域において、ユーフラテス南岸にある、パルミラへと通じる途上に位置するルサーファが重要な拠点となった。ウマイヤ朝は首都をダマスカスに置き、エルサレムにある岩のドームや、ダマスカスのウマイヤ・モスクをはじめとし、既存のキリスト教建築文化に大きく依拠した建造物を残した。ルサーファの市壁内には大モスク（写真2）が、市壁から南へ1キロメートルほどの位置には、ウマイヤ

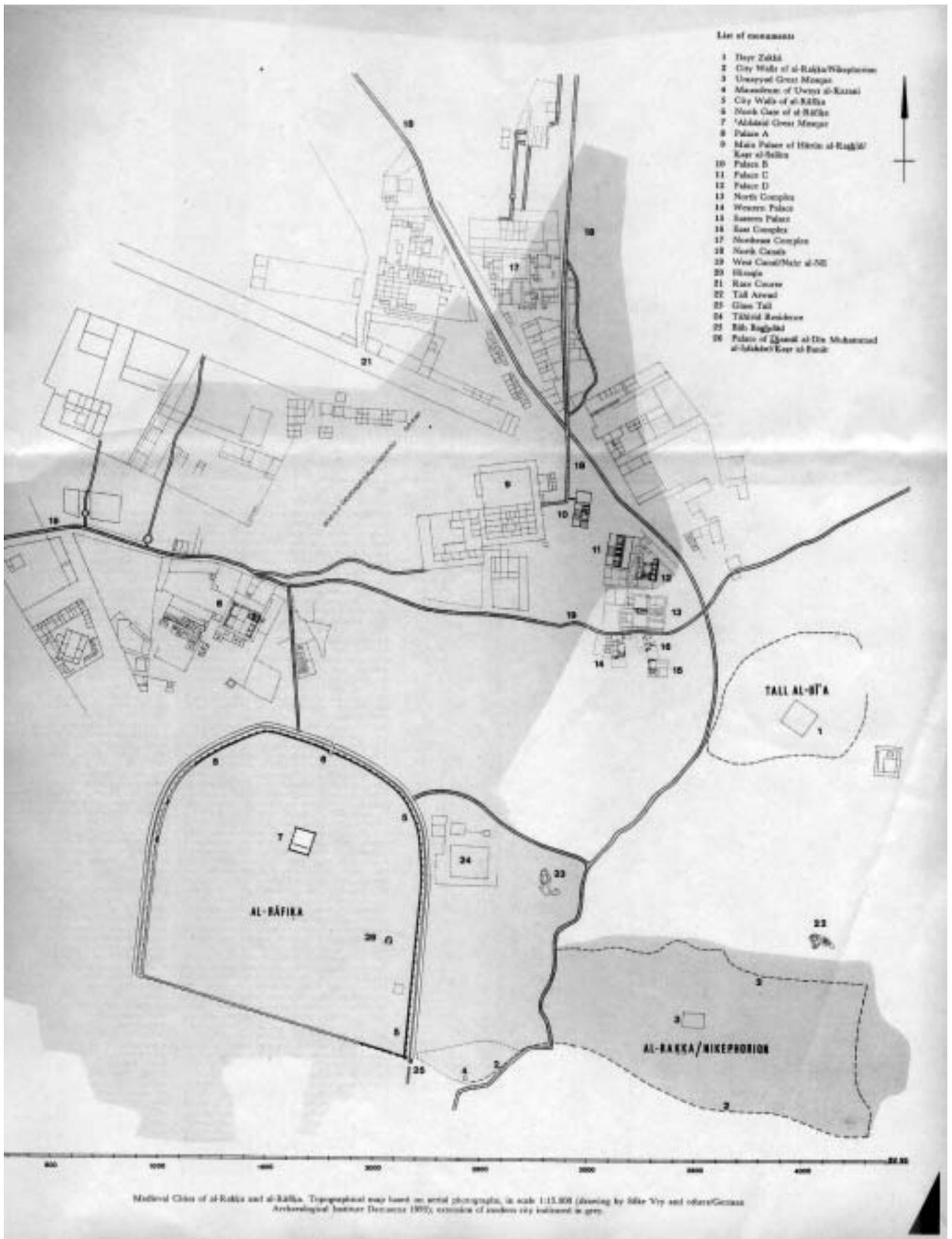


図1 ラッカ
Meinecke, M., al-Rakka, *Encyclopedia of Islam 2nd Edition*, Leiden, 1995

朝のカリフたちの宮殿が築かれた。ウマイヤ朝宮殿はフランス隊によって発掘中である。

当時、ラッカはルサーファに比べると小さな城塞であった。しかしながら、ウマイヤ朝カリフ・ヒシャーム(724 - 43年在位)と彼の義理の弟は、ラッカのユーフラテス南岸に農地経営をもくろんだ2つの宮殿を建設したという。



写真2 ルサーファのウマイヤ朝モスク

3. アッバース朝の勃興

ペルシア出身のアブー・ムスリム(725年頃生、755年没)が東イランで蜂起したことに端を発するアッバース朝革命により、ウマイヤ朝は滅亡する。シリア最奥だったウマイヤ朝を打倒する火の手が、東イランの地が上がったことは、次世代になうアッバース朝文化がペルシア文化に偏ることの前兆であったのかもしれない。アッバース朝第2代カリフ・アル・マンスール(713年頃生、754~775年在位)は、アラブ至上主義のウマイヤ朝体制から脱却し、中央集権的イスラーム帝国の創出に勤めたと評価される。彼は、新都バグダードを築き、イスラーム教を信奉する世界帝国として強大な権力を形成した。

ティグリス川とユーフラテス川流域のメソポタミアは、7世紀中頃まではサーサーン朝勢力のもとにあり、クテシフォンに都が置かれていた。クテシフォンの全容はまだ明らかではないが、幾何学的に整形ではないものの全体が円形を呈している。

アラビア半島から発したイスラーム勢力は、サーサーン朝の都市を支配し、あるいは放棄させるとともに、新たなアラブ軍が駐屯するための軍営都市を建設した。ユーフラテス川流域のクーファやバスラ、ティグリス川流域のワーシットは軍営都市の例である。マンスールの兄が創始したアッバース朝の拠点はクーファに置かれ、彼らが滅ぼしたウマイヤ朝のイラクにおける拠点はワーシットにあった。これらのアラブ軍営都市で

は矩形の市壁が築かれることが多かった。そして、町の中央に大モスクと支配者の宮殿が併置された。

4. 円城都市バグダード

マンスールがバグダードで提案した都城計画は、矩形の軍営都市とは一線を画する真円のプランであった。マディーナ・アッサラーム、すなわち平安の都と名付けられたこの円城は、いまだ発掘はなされていないが、ヘルツフェルトの復元によると、直径2.35キロメートルにおよび、外周を市壁と濠割でこまめ、東北、東南、西南、西北に市門が対称に配置された。市壁の内側には、壁で囲まれた3重の環状空地(ファシル)と2重の環状住宅区域(ラハバ)が設けられ、中央部は広大な円形広場であった。住宅地は、放射状の街路により扇形に分割されていた。外側は君臣の住宅地に当てられ、内側は、王子たちの住まい、カリフの私的宮殿、宝庫、台所などさまざまな役所や宮殿が占めていた。そして、直径1.5キロメートルあまりの円形広場の中央にモスク、宮殿、衛兵所、警察が建てられたという(図2)。

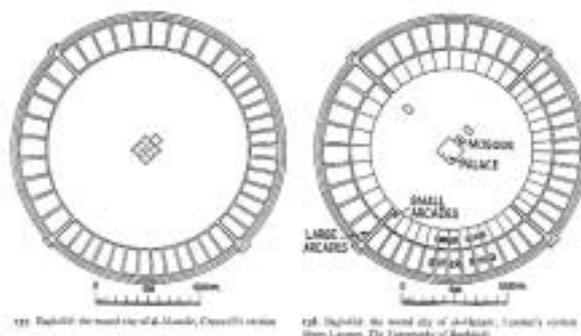


図2 バグダード円城都市の復元図
Lassner, J., *The Topography of Baghdad in the Early Middle Ages*, Toronto, 1970

4つの門から広場へと続く4本の通廊は、衛兵の詰め所であった。マンスールは円城外からこの通廊に市場を招致したものの、カリフ自身の安全確保を理由に再び商業建築を円城から締め出し、円城の南にあたるカルフ地区が繁栄したという。もともと、円城建設以前から南のカルフ地区には市場が設けられ、かなりの賑わいを見せていたようである。ちなみに、マンスールは在位中に円城の北東門の外側にフルド宮、そこからティグリス川を渡った地域にルサーファ宮を造営した。円城は、囲まれた部分だけで都市が機能していたわけではなく、むしろ運河とティグリス川に囲まれた大都市の中核におかれたカリフの居城であった。

円形都市の系譜は、幾何学的には真円ではないもののハトラやクテシフォンなどにみられる。さかのぼれ

ば、理想都市としての真円の形は、アッシリア帝国の図像に現れる。真円都市の実例として、古代のユーフラテス川流域においても、マリヤクウェイラのような実例が知られている。バグダードの円城はこうした系譜の上にある。

5 アッバース朝のラッカ

カリフ・マンスールは、円城都市バグダードを造営した後、治世の末期771 - 2年に、当時の集住地ラッカ(旧ラッカ)の西200メートルの位置に、朋友を意味するアル・ラーフィカという名の軍営を建設した。そこに、ホラサーン地方出身のペルシア人軍隊が常備した。ユーフラテス川の北岸にあるラッカはビザンツ帝国への前線基地として重要であった。2つの集住地、旧ラッカとラーフィカは次第に一体化し一つの市街地を形成するにいたった。

マンスールが造営したアル・ラーフィカには、周囲に剛健な市壁が巡らされた。市域は、東西、南北ともに1.3キロメートルあまりの馬蹄形をなしていた。周囲に市壁がめぐり総長5キロメートルに達し、132個の半円形ボルジュが守りを固めていた。現状では、南の直線部分は失われてしまったが、そのほかの曲線を描く部分は良く残る。市壁内のほぼ中央北側に、大モスクが位置している(写真3)。



写真3 大モスク、南東から

796年にカリフ・ハールーン・アル・ラシード(766年生まれ、786 - 809年在位)は、バグダードに首都機能は残したまま、ラッカを夏の首都とし、ラッカに壮大な宮殿を営んだ(写真4)。彼は、カリフ・マンスールの孫にあたる人物で、千夜一夜物語の主人公として伝説的に語られる一方で、3度にわたるビザンツ遠征で輝かしい成果をおさめた。アナトリア地方への拠点であるラッカは、その作戦上重要な位置を占めたのである。彼の宮殿はカスル・アル・サラーム(平安の宮殿)と呼

ばれ、市域はアル・ラーフィカと旧ラッカの北側へとスプロールしていった。



写真4 アッバース朝宮殿、東の宮殿

1950年から54年にかけて行われた町の北東部にある3つの宮殿からの遺構が、ラッカ博物館に収められている(写真5)。また、テル・ビアーの近くの宮殿群がドイツ隊によって発掘され、保存されている。ラッカの西8キロメートルの位置には、ヘラクラと呼ばれる未完の勝利記念建造物がハールーン・アル・ラシードによって築かれた。これらすべての宮殿域をつなぐかのように、ヘレニズム時代以来のラッカと、マンスールが造営したアル・ラーフィカの北側一帯には、運河網が張り巡らされ、多くのアッバース朝にさかのぼる建造物が埋め尽くしていたようである。9世紀初頭の広域のラッカは南北5キロメートル、東西4キロメートルに達する大都市となった。



写真5 アッバース朝宮殿の漆喰、ラッカ博物館所蔵

9世紀から10世紀のバグダードは、世界一繁栄し、人口100万人にも達する都市であったとうたわれるので、市域広がりから考えると、9世紀初頭のラッカはおそらく世界屈指の大都市であったことが想定される。

これらの考古学遺構のほかに、ラッカにはアッバー

ス朝にさかのぼるものはない。しかしながら、当時のラッカの法官長ムハンマド・シャイバニーは、ハナフィー派の法学院を設立し、法廷のことがアブー・アル・ファラジ・アル・イスファハニーによって収録された「詩歌の本(キターブ・アル・アガーニ)」に語られる。

アッバース朝期には、イスラーム教徒の建造物が著名であるが、キリスト教徒も併存していた。アンティオキアに中心があったシリア正教会のもとで、先述したテル・ピアの聖ザッカー修道院は10世紀まで存続し、ピースナー修道院(別名エストゥナー)も活動を続けていた。ラッカの北東4キロメートル、パリーク川沿いのスウエイラには、ユダヤ人のコミュニティがあり、シナゴグがあったという。近年、旧ラッカの北側で、ガラスや陶器の窯場も考古学的調査が行われ、広域のラッカを支えるための生産基盤も問い直されている。

809年のハールーン・アル・ラシードの死後、彼の息子アミン(在位809 - 813年)が即位し、アッバース朝宮廷は再びバグダードへと戻り、広域のラッカは次第に縮小していった。9世紀半ばの様式をもつスタッコ装飾が、アル・ラーフィカの東側、旧ラッカとの間の遺構から採取されたことから、マイネッケはこの時代の館跡と想定し、市域はマンスールの時代の規模へと戻っていったとする。10世紀に入り、ラッカの凋落はさらに著しく、人口減少とともに旧ラッカはさらに衰退し、市壁に囲まれたアル・ラーフィカの区域が町として生き残っていった。

6. 円形都市ラッカ

バグダードで活躍したタバリー(839 - 923年)は、環状空地(ファシール)および扇形の住宅地(ラハバ)や街路の構成などにおいて、ラッカは円形都市バグダードの計画に倣って造られたと説く。現在の市壁はユーフラテス川から1キロメートルほど北に位置しているが、当時は市壁のすぐ南をユーフラテス川が流れていたために、円形から馬蹄形に変更された。

本来、市壁は2重で、現在残っているものは内側の市壁であるとクレスウェルは語る。壁の高さは10メートルに達し、35メートル置きに円形ボルジュが突出し、南東の隅のボルジュは直径7.8メートルである。壁やボルジュは、外側を焼成煉瓦で覆い、内部を日乾煉瓦で築く。焼成煉瓦のサイズは、24~26センチメートルの正方形で、厚さ7センチメートル、日乾煉瓦のサイズは、42センチメートルの正方形で厚さ11~12センチメートルである。内側市壁の壁厚は5.85メートルに達し、環状

空地の幅は20.8メートル、外側市壁の壁厚は、4.5メートル、その外側に幅15.9メートルの濠が廻っていたという。元来は市壁に3つの入口が設けられており、近年、幅4メートルの開口部をもつ北門が発掘された。

7. 大モスク

大モスクは、周壁と南側礼拝室のファサード壁だけが残る(写真6)。中庭のミナレットと廟は後世の付設である。外周壁は厚さ1.7メートルで、市壁と同様に、4隅と各辺、計20か所に半円形のボルジュが突出する。日乾煉瓦は、45センチ平方で厚さ10センチメートルである。西側壁面の煉瓦積み最下層には石膏岩切石が積まれている。

復元によれば、敷地は東西92.9メートル、南北108.1メートルの矩形で、中央を中庭とし、南側に奥行3廊の礼拝室、それ以外の3方を奥行2廊の周廊とする。



写真6 大モスク、北西から見た外壁

焼成煉瓦造の礼拝室のファサード壁は、高さ10.5メートルが残るが、本来は13メートルの高さまで立ち上がっていたとクレスウェルは述べる。中央アーチの上のインスクリプションによれば、ザンギー朝の君主ヌール・アッディン・ザンギー(1118年生まれ、1146 - 74年在位)が、古いモスクのファサードの11のアーチとそれを支えるピアおよび礼拝室の切妻屋根を用いてこのモスクを再建したという。したがってこの部分は12世紀の建造物である。しかしながら、両端の幅1.73メートルのピア(写真7)だけは、アーカンサスの付柱の存在と中庭の隅柱に当たることから、クレスウェルは772年のマンスールの時代に属するとし、本来のファサードはウハイディルと同様に円形のピアで構成されていたと結論する。

礼拝室は、奥行30.5メートルが幅10メートル弱の3廊で構成されていた。ダマスクスのウマイヤ・モスク奥行37メートル間口136メートルに比すると小規模であ

る。クレスウェルは、中央廊はなく、間口方向に走る3本の切妻屋根を冠していたとする。煉瓦造、正方形中庭、ボルジュ付の外周壁とそこに開く複数の入口というメソポタミア的系譜と、3廊式、切妻建築というシリア的系譜がミックスした建築だと説く。



写真7 大モスク、ピアに残るアーカンサスの装飾

8. アッバース朝の宮殿

ラッカの北東部にあり、1950年代までに発掘された3棟の宮殿(宮殿B、C、D)に関しては、クレスウェルがスタッコの装飾様式から、8世紀後半期の建設であろうと推論する。772年にマンスールがラーフィカを造営した時代に建設され、その後もハールーン・アル・ラシードの時代の貨幣が出土することや、サーマッラーを建設したアル・ムウタシム(在位833 - 842年)のインスクリプションが残ることからも、9世紀前半も用いられていたとする。一方でマイネッケは、これらの宮殿建築は796年にハールーン・アル・ラシードの遷都後造営され、809年の彼の死後は頻繁な使用は途絶えてしまったと説く。

西に位置する宮殿Bは、南北に長い矩形で、南の宮殿部と北の庭園からなる。宮殿部は東西74.6メートル、南北115メートルで、壁厚1.5メートルの囲壁に半円形のボルジュをもつ。北側に東西68メートル南北50メートルの矩形の囲い地があり、壁厚70センチメートルの囲壁がめぐり、庭園が緑地に使われたことが想定される。

緑地の東西壁に入口があり、緑地内の南辺、すなわち宮殿部の北辺に巨大な入口が設けられる。入口は幅17メートルに達し、北西部の区画へと通じている。この区画は、東西35メートル南北49メートルの中庭の東西辺に列柱を配し、南辺に幅広の東西廊とそれに続く主室を逆T字型に配置する。これらの部分は焼成煉瓦敷きで、対称的な平面構成からも最も公的な部分であったことが推察される。南北4.25メートルの東西廊からは、ニッチや対の付柱など装飾的細部が掘り出された。

その背後の南北に長い中央の部屋からは、一辺12センチメートルのガラスの立方体がびっしりと漆喰地にはめ込まれた遺構が出土した。博物館には円形の板色ガラスを漆喰に挟んだものもあり、おそらく採光に用いられたと思われる。さらに奥の東西に長い部屋は、東西23.6メートル南北8.7メートルで、彩色を施したラスタールガラスが出土しているが、火災にあったことが推察される。さらに奥は、東西35.4メートル南北4.3メートルの東西廊となり、南の庭園へと通じていた。

宮殿の東側部分では、西辺にアクセス用の南北路が配される。最北辺には、幅2~2.5メートル奥行2メートルの8つのニッチが設けられ、その一つから、カリフ・ムウタシム(在位833 - 842年)のインスクリプションが発見された。ニッチの向かいに屋上への階段があり、この区画は、おそらく宮殿の衛兵詰所であったことが推察される。その南側に4つの小中庭と周囲の部屋があり、出土遺構から北の2つのユニットは王宮の官使用であったらしい。その南側には大きな中庭と列柱廊背後の部屋があり、南側の庭園へと続いていた。

この遺構の南東98メートルに宮殿Cがあり、東西117メートル南北160メートルの矩形である。壁厚は1.8メートルで、周囲に半円形のボルジュを配する。囲い地内は西、中央、東の帯状の区画からなる。西の区画は崩壊がはなはだしく、中央の区画に6つの中庭式の住居ユニットが発掘され、東の区画からは建物跡は出土しなかった。全体の入口は西の区画の北辺と南辺にある。北辺の入り口は大きく、南北58メートル東西37メートルの中庭へと通じていた。中庭の周囲には曲面架構を冠した凹部が並び、その南にはハンマーム、さらに南の区画の南西部に貯水池が見つかった。装飾豊かな漆喰細工などから、西の区画は公的な場所であったと推察される。中央の区画の住居ユニットの構成は中庭と諸室からなる私的な区画と推察されるが、その大きさは微妙に異なる。東側の区画は庭園であった。北入口の西側に小さなモスクが発掘された。

この遺構のさらに南東に小さな宮殿Dが発掘されたが、ボルジュをもつ囲壁は見つかっておらず、宮殿域の一部であると思われる、南北に長い3つの部屋を並列し、その南に、東西に長い部屋を配し、その間を廊下で連結していく部分は、宮殿Bの公的な広間の部分とよく似ている。

これらの宮殿の南側に、北、東、西の宮殿と命名されている。東の宮殿の修理が1982年にダマスカスのドイツ考古学研究所によって行われた。全体の中央をほぼ東西にニール運河が走り、北の宮殿は東西250メートル南北150メートルほどの広い区域をいくつかの中庭建

築で構成され、そのうち中央の小中庭が接している部分が発掘された。北の宮殿の上には集落があり、再び発掘が始まる予定があるとの情報を得た。東の宮殿は、南北に長い矩形の中庭の南辺に、東西廊を配し、その背後に南北に長い3つの部屋を置き、さらに奥に東西廊を有する形で、先に述べた宮殿BとDの公的主室の構成と似ている。中庭の北西辺には貯水池の跡がある。全体は日乾煉瓦造で、その上に漆喰が塗られる。西の宮殿は、南北に長い区画の東辺と南辺周囲が発掘された。南東に位置する中庭の南辺に同様な構成の公的主室が見られる。

これらの宮殿に見られる漆喰装飾や主室の構成は、サーサーン朝宮殿の建築文化に大きく依拠する。

9. ヘラクラ

ヘラクラは、ラッカの西8キロメートルに位置し、以前はローマ時代の軍営跡とみなされていた。直径500メートルの円形囲壁の中央に、一辺103メートルの矩形の石造建造物があり、未完である。煉瓦を用いず、大振りの石膏岩の切石造の特異な建築である。

ヘラクラは、806年にハールーン・アル・ラシードがアナトリアにあるビザンツ都市ヘラクレアを征服したことを記念して建設されたという説が優勢である。

10. ザンギー朝とアイユーブ朝

10世紀に入り、トルコ族傭兵の力によって、アッバース朝が傀儡化すると共に、一時はアッバース朝の都として世界屈指の都市であったラッカも、縮小し、活気を失っていった。しかしながら、12世紀から13世紀にかけて、ザンギー朝とアイユーブ朝のもとでいくつかの建設活動が行われた。

ザンギー朝(1127 - 1251年)は、セルジューク朝のスルタンの後見人(アターベク)として成立したトルコ系の王朝である。1135年には初代イマード・アッディン・ザンギー(1127 - 46年在位)が、ラッカを征服する。1146年に彼がカラアト・ジャバルで暗殺されると、第2代ヌール・アッディン・ザンギー(1146 - 74年在位)への王位継承はラッカの宮殿で行われたという。ヌール・アッディンは、アレppo、ダマスカスを拠点としモースルに至るジャズィーラ地方を支配し、イランを拠点としたセルジューク朝の建築文化を取り入れ、ダマスカスやアレppoに学校(マドラサ)や病院を建設した。東への拠点たるラッカにも力を入れ、2軒の学校と病院を寄進したという。

ヌール・アッディンに仕えたクルド系のサラーフ・アッディーン(1138年生まれ、1169 - 93年在位)が、エ

ジプトを拠点としてアイユーブ朝(1169 - 1250年)を開く。1174年のヌール・アッディンの死後、シリアはアイユーブ朝が優勢で、ラッカは1182年に同朝に編入された。1201年から1228年の間に、アイユーブ朝の王子がラッカに浴場付きの緑に囲まれた宮殿を建設したというが、遺構は残っていない。

この時代の建造物として、アッバース朝期にさかのぼる大モスク(写真8)に、ヌール・アッディン・ザンギーがファサードの改修と円形断面のミナレットを付加した。1146年、1158年のインスクリプションが残り、1163年には工事が完成した。25メートルの高さをもつミナレットは、平面が円形で、11世紀以来セルジューク朝でさかんに建設されるようになった塔で、ペルシア起源を物語る。



写真8 大モスク、ファサードのインスクリプション

町の南東に位置するバグダード門(写真9)は、20世紀初頭以来、8世紀アッバース朝の建造物といわれてきたが、近年、壁面から離れた位置とアーチの形によって、12世紀の建造物の可能性が強まっている。



写真9 バグダード門、北西からのぞむ

また、東市壁の内側にあるカスル・バナート(写真10)も、アッバース朝のハールーン・アル・ラシードの宮

殿と言われてきたが、ザンギー朝のインスクリプションもあり、同じく12世紀の建造物である。マイネッケは先述したヌール・アッディンの戴冠は、この宮殿で行われたであろうと推察する。小規模な中庭の周囲に比較的高い4イーワーンの形式が確立していることから、12世紀の建造物とすることが妥当である。

この時代のラッカは、ラッカ・ウェアという美しい青色釉薬の焼物で有名である。アッパース朝の大モスクの南側、市壁内から工房跡が見つまっている。



写真10 カスル・バナート

1258年にモンゴル族のバグダード占領によって、バグダードに依っていた傀儡政権アッパース朝は滅亡し、ラッカも1260年代にはモンゴルの侵入を受け、町は再び疲弊する。

11. おわりに

16世紀にはオスマン朝のもとで、ラッカの名前が再び記録にあらわれる、ラッカ地方として設定されるが、その中心はラッカ市ではなく、北200キロメートルにあるウルファであった。17世紀オスマン朝の旅行家エウリヤ・チェレビは、1649年の冬にラッカを訪れ、かつては灌漑されていた庭園跡やラッカの遺跡の中にアラブ人やトゥルクメンのテントが点在している様相を伝える。1683年にはラッカの市壁に歩兵軍団イエニチェリが駐屯した。

19世紀後半にオスマン朝がコーカサス人を馬蹄形都市の南辺周辺に移住させた。その頃から少しずつラッカの人口は増えたが、20世紀半ばでも5000人足らずで

あったという。その後、農業経営の中心地として1981年に人口は9万人に達し、さらに地方中心都市として成長を続け、21世紀を迎えている。

しかしながら、「1200年ほど前、ラッカは世界屈指の大都市であった。」ことは、現在みるラッカの町の様相からは想定不可能である。この繁栄は、ユーフラテス川沿いのジャズィーラ地方という、ラッカの地理的位置がもたらした賜物であった。

都市の興亡は、考古学的遺構や建築遺構の中にその足跡を刻んでいる。ユーフラテス川流域の数千年に及ぶ都市の興亡史の終わりの一端を紐解いてみただけであるが、その動的態様には目を見張るものがある。

主たる参考文献

- Le Strange, G. *Baghdad during the Abbasid Caliphate*, London, 1900
- Massignon, L. *Mission en Mesopotamie(1907-1908)*. Vol.2. Cairo, 1912
- Herzfeld, E. and F. Sarre *Archaeologische Reise im Euphrat und Tigris Gebiet*. Vol.2, Berlin, 1921
- O. Reuther, *Die Ausgrabungen der Deutschen Ktesiphon-Expedition im Winter 1928/29*
- Al-Khatib al Baghdadi, *Ta'rikh Baghdad*. 14 Vols. Cairo, 1931
- Ketab al Buldan* ed. M.J. De Goeje, Leiden 1892. , trans. G. Weit, *Les Pais*, Cairo, 1937
- Creswell, K. A. C., *Early Muslim Architecture*, Vol.2, Oxford, 1940
- Lassner, J. , *The Topography of Baghdad in the Early Middle Ages*, Toronto, 1970
- Duri, A. A., *Baghdad, Encyclopedia of Islam 2nd Edition*, Leiden, 1985
- Creswell, K.A.C., *A Short Account of Early Muslim Architecture*, The American University in Cairo Press, 1989
- al Sayyad, N., *Cities and Caliphs*, Westport, 1991
- Burns, Ross, *Monuments of Syria*, I.B. Tauris, 1992
- Ball, Warwick, *Syria*, Melisende, 1994
- Meinecke, M., al-Rakka, *Encyclopedia of Islam 2nd Edition*, Leiden, 1995

パルミラのテッセラについて

宮下佐江子（古代オリエント博物館）

計画研究「オアシス都市パルミラにおけるビシュリ山系セム系部族文化の基層構造と再編」研究代表者

はじめに

パルミラは紀元前18世紀頃にはマリ文書にその名がみられる、古くから砂漠を行き交う人々に利用されたシリア砂漠中のオアシスである。

その最盛期はシリアがローマ帝国の属州となった紀元前1世紀頃から始まり、東西交易の要として大いに繁栄し、中国漢代の絹織物も多数将来されていたことが、塔墓の遺物から判明している。しかし、紀元後272年にローマ帝国内の混乱に乗じて帝国からの完全独立を図って反旗を翻したが、ローマ軍の圧倒的軍事力によって壊滅せられ、その後歴史の表舞台に登場することはなかった。

パルミラの本格的な考古学研究は1920年代の当時のシリアの委任統治国であったフランスを中心におこなわれ、第2次大戦後に、独立を果たしてからは、シリア考古総局による管轄のもとで、フランス、ポーランド、ドイツなどの調査隊が活動している。

日本隊も1990年から奈良県立橿原考古学研究所を中心とする発掘調査が開始され、これまで塔墓1基、地下墓4カ所、単独墓1基を明らかにし、2つの地下墓は修復復元し、パルミラ博物館の管理下で一般に公開している。2006年以降は現在の博物館に近い遺跡の市壁付近の家型墓の調査をおこなっている。

パルミラの歴史、社会構成については、このような長年の調査、研究によって明らかにされつつあるが、実の社会生活等状については未だ不明な点も数多くある。その1つにパルミラで多く発見されるテッセラという粘土製の小さな札がある。古代オリエント博物館でも数点所蔵し、個人コレクターからも寄託を受けているが、今回はそれらについて紹介していく。

パルミラのテッセラ

パルミラではテッセラと呼ばれる粘土製の札が多数収集され、1940年代から50年代にかけて、それらを詳細に検討し、集成した研究が上梓されている。

H.Ingholt, H.Seyrig, J.Starcky による *Recueil des tessères de Palmyre* (RTP)

Mesnil du Buisson による *Les tessères et Monnaies de Palmyre* などである。それらによれば、テッセラはその殆どが粘土製であるが、稀に青銅製、鉛製、鉄製、ガラ

ス製などもみられる。大きくても縦横4cmを越えるものはなく、3cm前後が最も多く、なかには1cmに満たないほどのものもある。

表と裏に文様と文字が型押しされている。RTPには1132種のテッセラが集成されているが、その後のパルミラシャミン神殿の調査やベル神殿の調査で、RTPに掲載されていないタイプのテッセラも報告されている。

そのかたちは、四角形、円形、楕円形、菱形、三角形、五角形、台形、時には神殿を模したものなど様々である。描出された図像で、しばしば目にするのは、寝椅子に横たわり、墓室内彫刻の饗宴図と同じ構図であるが、墓室内彫刻は饗宴図が複数の人物であるのに対して、テッセラでは一人ないしは二人の人物像である。これは、テッセラの場合が小さいことや、その用途にも関係しているであろう。また、上半身のみの正面観の人物や椅子に座っている像もある。これらはいずれも神官を示す、円筒形の帽子を被っている姿であらわされることが多い。

神像と思われるものは、その神性に関わるアトリビュートとともに描出されている。動物像は駱駝、ライオン、雄羊、牛、グリフォンなど、植物文は口ゼッタ、松毬、葡萄樹、さらに壺やひしゃく、天秤などの道具、星や三日月があらわされることもある。

こうした図像とともに、パルミラ文字による人名や神名が刻まれたり、稀に日付が記されることもある。また、図像はなく、文字だけのものもあり、ベル神やパール神、様々な神への祈念文、個人名が記されている。



ベル神殿全景

しかしながら、テッセラの正式な出土報告は少なく、多くはパルミラの住民から購入されて、個人コレクションや博物館に収蔵されている。

H.Seyrigによれば、ベル神殿聖域から2点のテッセラの出土が報告されているが、実際にはより大量のテッセラが廃土や表面の埋土、溝の埋め土から出土したという。しかし、それらの多くは道の補修材料として砕かれてまぜものとして用いられた破片であった。アゴラの発掘の際にも5、6点が見いだされたが、攪乱した土から出土し、本来の場所の特定はできていない。

また、パールシャミン神殿の発掘報告書によれば、神殿北側の中庭の埋土中に散乱していたもののうち、21点のみ採りあげている。

H.Seyrigはこのような状況から、テッセラの用途について、それらが一過性で、使い捨てられたもの、すなわち神殿での宗教的宴会(信徒の団体、神官団など)や特定多数の市民への食糧あるいは葡萄酒配布の引換券であろうと推測している。記された名前は宴会の主催者であり、配給食料の提供者ではないかと仮定している。

確かに、これまで多数発掘されている墓からは、テッセラの出土例はなく、それらの正式な出土報告は神殿の聖域からのものだけである。16年に及ぶ日本隊の様々なタイプの墓からもテッセラの出土例はない。このような事実から、これが葬礼に関わるものではないことは明らかである。

古代オリエント博物館収蔵テッセラ

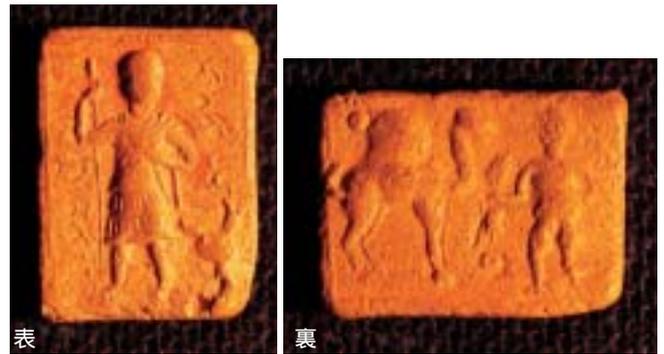
では、古代オリエント博物館収蔵のテッセラを紹介してみよう。

図1 古代オリエント博物館寄託 東京個人蔵
30×30 RTP773



表：葡萄樹の下で寝椅子に横たわるローマ風衣服、神官の円筒形被り物を着用した男性。寝椅子の下側に銘。
銘 NŠWN MLKW NŠWM
Neshoum Malkou Neshoum
裏：中央に天秤を持った男性。左右に椰子の葉。周囲に2頭づつの羊の頭、牡牛の頭、ライオンの頭。合間に6つの丸い点(星?)

図2 古代オリエント博物館寄託 東京個人蔵
17×22 RTP174



表：袖付きのチュニックを着てよろいを装着した男性。釣り鐘型の帽子を被り、右手に槍、左手に剣の柄?を持つ。左肩の後ろに小さな盾がみえる。右下に牡牛の頭と小さな球。画面左側、男性の右腕下と画面右側牡牛の頭の上に銘
銘 左 TYM MD Taimoamad 右 TB'WT Tababout
裏：左側に積荷を背負った駱駝。右側に頭に羽根をつけた正面を向いたヘルメス。右手に巾着財布と葉の付いた小枝を持つ。左手を胸の前で曲げる。羽根の付いたヘルメスの杖が肩越しに見える。

図3 古代オリエント博物館 東京個人蔵
30×30 RTP831



表：神官の円筒形被り物を着用した男性の上半身像。両肩に星? 両サイドに花?
水平の凸線を引いた下3分の1に銘
銘 MLKW'TNW(RY) Malkou Aténouri
裏：上部に顎鬚(?)があり、頭部に光芒を表した男性の右向きの横顔像。下半分は両脇に6弁の花、中心に草?あるいは花の茎?

図4 古代オリエント博物館蔵
AOM186 20×21 RTP687



表：スツールに座るローマ風衣服、神官の円筒形被り物を着用した男性。右手に小さなものを持っているポーズをとる。彼の前には天秤があり、右側の天秤皿の下に何か積み上げられているが、RTPによればこれは食料ではないかという。すなわち、分配する食料品を計っている場面である。天秤の上方に銘がある。
銘 NS' Neshu
裏：右手に長い椰子の葉を持つローマ風衣装の男性が立っている。画面右側には楕円形の中に右向きでリラをもって座っている人物像。RTPではアポロンであるかもしれないとしている。RTPのなかに収集されているいくつかのテッセラにも同一の

リラを持つ人物像の図像がみられる。右側に銘。
銘 NS' Nesha

図5 古代オリエント博物館蔵 AOM 15×11



表：正面向きの男性半身像。両側にサソリ。赤い着色が残る。
裏：中心に長い柄のひしゃく。両側にサソリ。赤い着色が残る。

図1-4までのテッセラはRTPで該当する例をみることができたが、図5のテッセラはみあたらなかった。サソリの描出されたテッセラはRT647、648、649、1122にもあるが、人物やひしゃくと組み合わせられたものは見あたらない。これは1980年代に当館がパルミラ在住の知人より寄贈されたもので、新しいタイプのテッセラであるかもしれない。

おわりに

こうしてみると小さく、稚拙に見えるテッセラも細かいデザインがほどこされ、様々な意味がこめられていることがわかるだろう。しかし、これらの制作年代、実際の用途については実はまったく確かではないのだ。前述したように、まれにテッセラ本体に年代が刻まれているものがあり、そこからこれらの使用された時代は1-3世紀とされているが、これはパルミラ最盛期の年代と一致するというだけのことでしかない。

また、用途についてもパルミラ研究の第一人者であるH. Seyrigが、神の名前が多く記されていることから宗教的な集まり、宗教的宴会への参加のための札、あるいは食料分配のための札という説を述べたが、それも1つの推論にすぎない。これがどのような状況で使用されていたのか、はっきりした記録はなに一つない。

もとより、パルミラは巨大な石製建造物が建ち並び、中国漢代の絹が墓から出土し、墓の彫刻群に実物の少ないパルティア美術の影響がみられ、一時的とはいえ、小アジアからエジプトまでふくむ土地を支配した古代社会に名を残すオアシス都市であるにもかかわらず、パルミラ自体から出土する文字資料は墓や神殿に遺された定型的文章がほとんどである。唯一の例外は19世紀にアルメニア人探検家アバメレク・ラザロフがアゴラ付近で発見した関税法碑文とよばれる4枚の石灰岩の大型石碑である。しかし、それはパルミラの輸出入品への関税表や商業活動にたいする徴税法という当時の社会生活を雄弁に物語るものであるはずだが、資料の摩滅による判読の困

難さや関連資料の乏しさから、不確かなことが多い。

先に述べたようにテッセラのほとんどはパルミラの住民によってかき集められ、商品として収集家や博物館に納められた。こうした状況のなかで、碑銘学者は文字の記されたテッセラに注目し、それらを解読することに情熱を注いだが、それはテッセラの文字のみに注意が向けられた。彼らはそれらを解読してパルミラ語を研究し、分析した。

発掘現場の考古学者もテッセラの出土状況を後代に伝達することにまったく配慮することはなかった。彼らの関心は巨大な神殿の建築方法や構成、その建立年代であり、報告書にはごみための塵芥のようなテッセラの出土状況を示す写真も図面も、記述さえなく、H.Seyrigの出土状況に関する記述だけがかろうじて残っているというのが現状である。

RTPによれば、食料分配はセム系の伝統の1つであるとあっさり記述されている。パルミラが東西交易の1つの拠点のオアシス都市として発展してもその中心的住民の慣習には伝統的なものが数多く残されていたと考えられるが、その仮説をテッセラの図像から読み取ることはできないだろうか？これまでの墓の発掘で得られた知見から、死せる人々の宴会の特色とテッセラのそれとの比較、当時、このような習慣がどこまで行われていたのか周辺遺跡の出土遺物の再検証、残された名前についての精査、など、いま一度その図像を再検討していくことを今後の課題としたい。

参考文献

- P. Collart 1957: "Le Sanctuaire de Baalshamin à PALMYRE Fouilles Suisses 1954-1955-1956", *Les Annales Archéologique de Syrie*, VII., 67-99.
- J. Charles-Gaffiot et al. 2001: *MOI, Zéobiereine de Palmyre*.
- C. Dunant 1959: "Nouvelles Tessères de Palmyre", *Syria*, XXXVI, 102-110.
- R. Fellmann, C. Dunant 1975: "IV. Les Tessères", *Le sanctuaire de Baalshamin à PALMYRE*, 113-116.
- H. Ingholt, H. Seyrig, J. Starcky 1955: *Recueil des tessères de Parmyre (RTP)*.
- Comte du Mesnil du Buisson 1944: *Les tessères et Monnaies de Parmyre*.
- M. Pic 1993: "LES TESSÈRES DE PALMYRE", *PALMYRE*, 82-136.
- H. Seyrig 1933: "Antiquités Syriennes" *Syria*, XIV, 260-263.
- H. Seyrig 1940: "Les Tessères Palmyréniennes et le banquet rituel", *Mémorial Lagrang*, 51-58.
- H. Seyrig, R. Amy, E. Will 1975: *Le Temple de Bel a Palmyre*.

ソビエト軍製地形図を利用したテルの分布調査 - シリア・ユーフラテス河中流域を対象として -

後藤智哉 (国士舘大学大学院人文科学研究科博士課程)

計画研究「西アジアにおける考古遺跡のデータベース化の研究」研究協力者

長谷川均 (国士舘大学文学部)

計画研究「西アジアにおける考古遺跡のデータベース化の研究」研究分担者

1 はじめに

計画研究班「西アジアにおける考古遺跡のデータベース化の研究」(研究代表者:松本健)では、衛星画像の解析による西アジアでの遺跡データベースの作成を進めている。現地調査が困難な地域では、遺跡の調査にリモートセンシングの技術を使用することが有効である。従来は空中写真や衛星画像の画像判読から遺跡を抽出することが多かったが、広範囲の面積を研究対象とする場合は時間がかかり現実的でない。広範囲を撮像した衛星画像から自動的に遺跡を抽出することができれば、迅速に調査を進めることが可能となる。しかし、衛星画像から遺跡を自動抽出するには、遺跡の分光特性や形などをパターン化し、解析時に使用する教師データを作成する必要がある。教師データの作成には、既存の遺跡データベースを利用して位置を特定できればよいが、資料の入手が難しい場合は遺跡分布図の作成から始めなくてはならない。

遺跡の分布図作成では現地調査とともに、地形図の判読結果を合わせることで調査の効率が上がる。使用する地形図は、現在のものより古いものが望ましい。これは人為的に引き起こされた土地利用の変化の影響を少なくできるからである。また、空中写真測量によって作成された地形図であれば、投影法の変換を行うことで容易に他の衛星データと重ねることが可能である。中東地域では第二次世界大戦以降、アメリカとソビエトによって正確な地形図が作成されており、ソビエト政権の崩壊によってそれらの地形図は一般でも入手可能となっている。特にソビエト軍製地形図は、インターネット経由で地図店からデジタルデータを購入することができる。

本稿は、遺跡の現地調査を許されたユーフラテス川中流域にて、主にテル型遺跡の分布調査を行った結果の報告である。調査は、まず机上作業としてソビエト軍製地形図から遺跡と思われる地点を読み取った地図を作成し、2007年8月12日～16日の現地調査によってその地点が遺跡であるかを確認した。またSPOT衛星の画像判読によって遺跡であると思われる地点についても調査した。なお現地の調査地点が遺跡かどうかの判定には、シリア考古局のモハムート氏、東京大学大学院博士課程院生の木内氏に表採遺物によって確認していただいた。

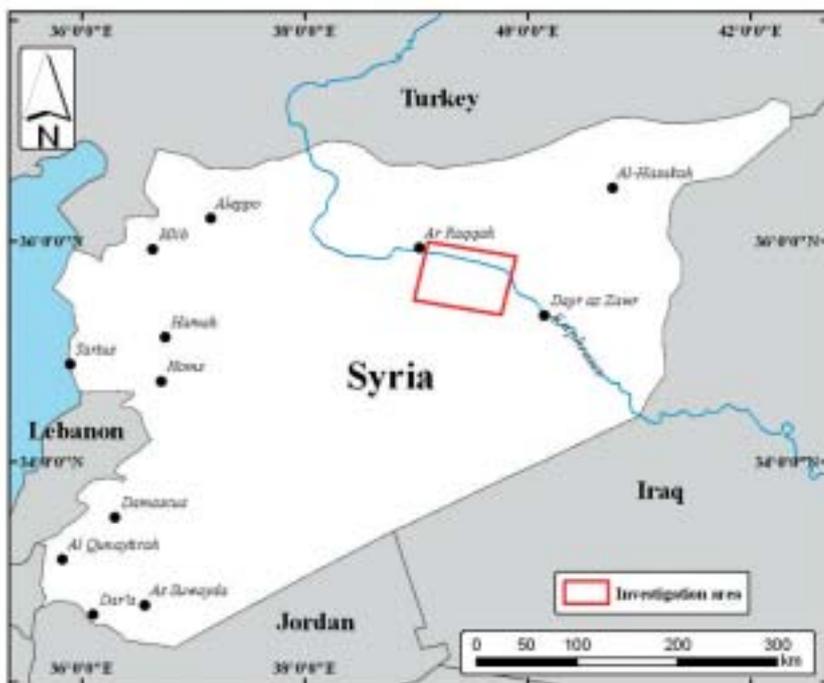


図1 調査対象地域

2 調査地域

ビシュリ山系からユーフラテス川までが含まれるSPOT衛星1シーン分の4380km²の範囲を調査地域とした(図1)。特に現地調査では、主にラッカから約70km下流までの、ユーフラテス河右岸および左岸に分布するテル型遺跡の調査をおこなった。

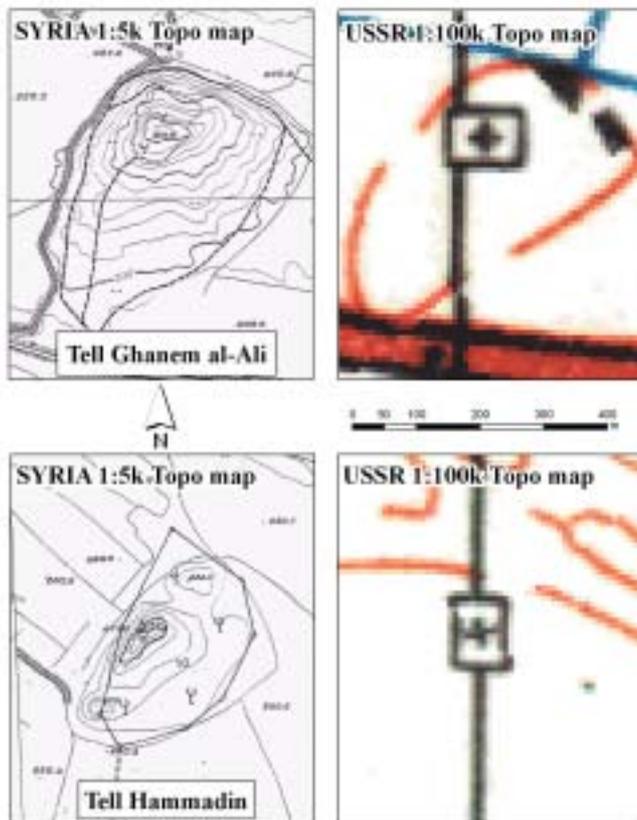


図2 ソビエト軍製地形図に描かれているテル・ガーネム・アル・アリとテル・ハマディーン

3 使用したデータ

地形図：ソビエト軍製地形図(縮尺10万分1)、シリア製地形図(縮尺2千5百分1)

ソビエト軍製地形図は、1984年刊行の地図番号「I - 37 - 7」「I - 37 - 8」「I - 37 - 19」「I - 37 - 20」の4図幅を使用した。地形図の図歴は、1959年から1962年にかけて作成された後、1979年から1981年ごろ改版されている。等高線間隔は20m、投影法はガウス・クリューゲル図法で、データムはPulkovo 1942、回転楕円体はKrasovskyである。ソビエト連邦時代は一般人が地形図を購入することは困難であったが、連邦の崩壊後に機密がとかれて購入可能となった。

シリア製地形図はEUPHRATES PROJECT AUTHORITYによって刊行されたもので、1961年から1962年にかけてイタリアの企業によって作成されている。空中写真測量の技術が使用され、等高線間隔は1mである。地形図には投影法やデータムなどについての情報が記載されていない。

衛星データ：SPOT5 High Resolution Visible / Panchromatic Mode Level 2A (解像度5m)

データの処理レベルは、ラジオメトリック補正と幾何補正とUTM図法に投影されているが、投影変換にはGCPは使用されていない。データムはWGS84が使

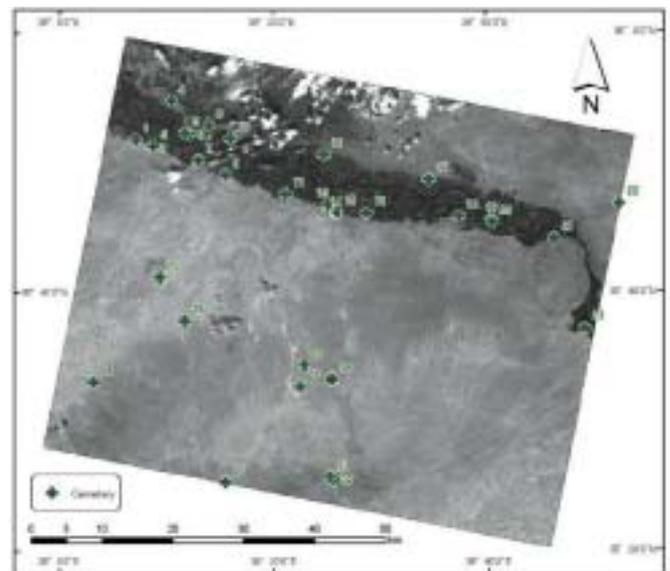


図3 ソビエト軍製地形図から読み取った「Cemetery」記号の分布位置(背景図はSPOT画像)

用されている。

4 調査方法

現地調査を行う前に、地形図の判読から調査対象を絞り込んだ。対象地域で入手可能な古い地形図のなかで、写真測量によって作成されているものに、ソビエト軍製地形図がある。SPOT衛星画像の地上位置が正確であるという前提で、衛星画像に地形図の位置情報を合わせた。今回使用した衛星データの位置精度は、約50mである。ソビエト軍製地形図は図郭線に記載されている座標値を利用して投影変換を行い、シリア製地形図については図内のグリッド線を利用して変換を行った。すべての地理情報は投影法をUTM図法、データムと回転楕円体をWGS84に統一し、GISにて管理した。

遺跡抽出の方法として、長谷川(2007)および木内(2007)で報告されているテル・ガーネム・アル・アリ遺跡とテル・ハマディーン遺跡を教師データとして利用した。2種類の地形図に描かれたテルを図2に示す。両遺跡は、ソビエト軍製地形図では四角で囲まれた十字で表されている。U.S. Army(1958)によれば、この凡例が表す土地利用形態は「Cemetery」である。そこで、他の凡例「Cemetery」も遺跡を表している可能性があるかと仮定し、対象地域の「Cemetery」分布図を作成した(図3)。調査範囲内の「Cemetery」は、ユーフラテス氾濫平およびその周辺の段丘面に22箇所、ジャバル・ビシュリ地域に10箇所分布している。

また、両遺跡がSPOT衛星画像でどのように表現されているかを図4に示す。画像判読では遺跡の土地被覆状況は裸地と考えられる。遺跡は、周辺の農地と比

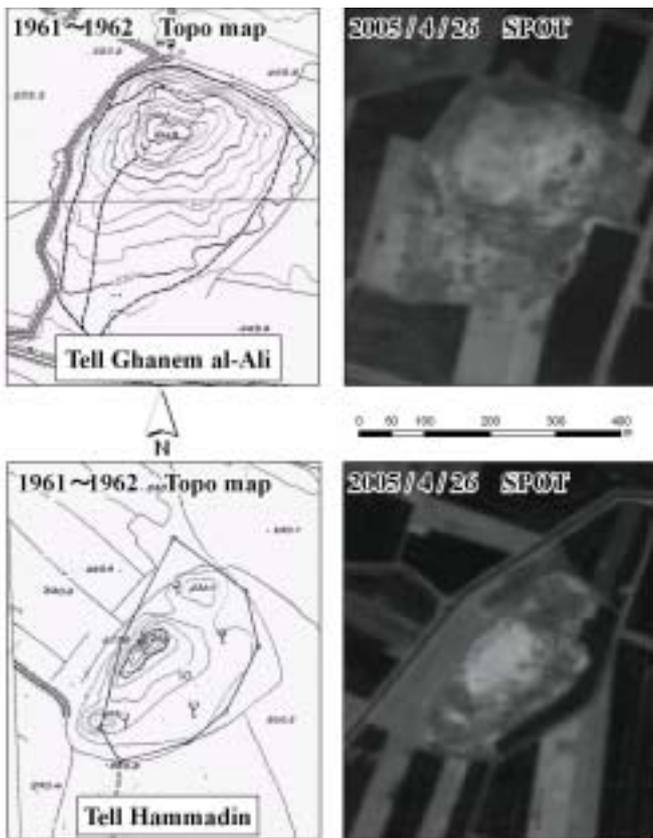


図4 地形図とSPOT衛星で捉えられた「テル」の形状



写真1 テルを現代のイスラム墓地として利用している例(テル・アル・テベニー)

べると楕円形の裸地として判別可能であった。

現地調査では、シリア国内でGPS受信機が使用できない事情により、調査地点へ到達が容易と思われるユーフラテス河氾濫原を中心に踏査ルートを選定した。

5 調査結果

5日間の現地調査で踏査した凡例「Cemetery」は、ユーフラテス河氾濫原およびその周辺で22箇所、ジャバル・ビシュリ地域で1箇所である。そのうち遺跡と確認できた地点は、ユーフラテス河氾濫原およびその周辺で13箇所みられた。ユーフラテス河流域の氾濫原では、

表1 今回調査したテル一覧(X,Y座標値の測地系と回転楕円体はWGS84、UTM帯は37)

Tell No.	Tell Name	UTM_X (m)	UTM_Y (m)
1	Tell Mesri 1	509381	3977710
2	Tell Mesri 2	510188	3977644
3	Meqbara Dedebe	518111	3969385
4	Rebtat Aybaid	521212	3970698
5	Meqbara Al Kerama	524127	3968875
6	Meqbara qadima	537222	3966419
7	Maqam Ali abu Hussan	551706	3962442
8	Shekh Mussa	552195	3962977
9	Tell Al Hemetha	563119	3958009
10	Tell bu Shems	570697	3958073
11	Tell Shennan	519728	3965812
12	Tell Hammadin	531907	3960907
13	Tell Ghanem al Ali	537977	3959443
14	Tell Betha	543485	3958314
15	Tell Swyda	556431	3957898
16	Tell Saghir	560993	3957401
17	Tell Ahmar	561112	3956993
18	Tell Qelaa	569088	3955282
19	Tell Al Tebeni	574149	3941826

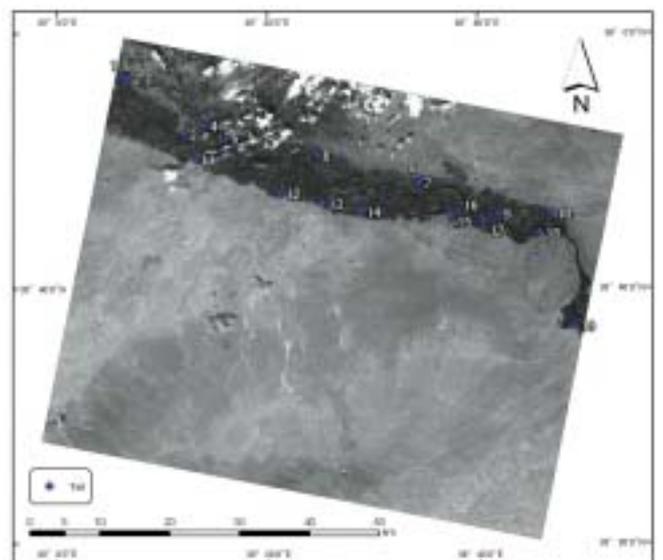


図5 ユーフラテス河中流域のテル分布図(背景図はSPOT画像)

凡例「Cemetery」がテル型遺跡であった確率は59%である。テル型遺跡の土地利用状況は、3箇所を除いて現代のイスラム墓地として利用されていた。現在、テルをイスラム墓地として利用している例を写真1に示す。

また、SPOT画像の判読から遺跡だと推測して調査した地点では、6箇所中4箇所がテル型遺跡であった。

ソビエト軍製地形図の凡例から特定した13箇所、SPOT画像の判読からの4箇所、住民からの情報による2箇所のテル型遺跡をあわせた一覧を表1に示す。遺跡の名前は近隣住民への聞き取り、X,Y座標値は遺跡中心のUTM座標値(単位m)をSPOT画像から読み取ったものである。

図5に今回調査したユーフラテス河中流域のテルの分布を示す。調査範囲内ではユーフラテス河左岸に10

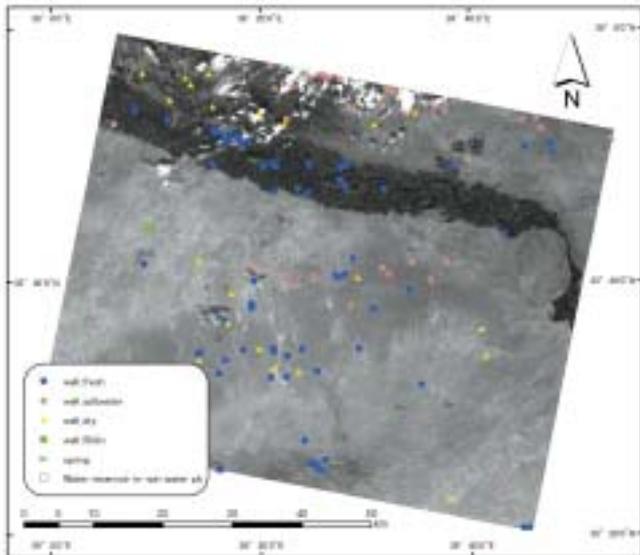


図6 ソビエト軍製地形図から読み取った井戸の分布位置（背景図はSPOT画像）

箇所、右岸に9箇所のテルを確認することができた。

6 終わりに

今回の現地調査は、ユーフラテス河中流域の氾濫原を中心に踏査したが、事前にソビエト軍製地形図の判読と衛星画像判読により調査地を絞り込んでいたため、円滑に調査を進めることが可能であった。

ソビエト軍製地形図は、軍事作戦に使用される目的で作成されており（East View Cartographic 2005）、墓地の情報だけでなく地図作成時の井戸水が飲用可能かどうか等の貴重な情報が記載されている（図6）。ユーフラテス中流域の氾濫原において、ソビエト軍地形図の凡例と衛星画像判読の結果を参考に遺跡の分布調査を行うことは有効であるといえる。

現地調査時の問題点として、GPS受信機が利用できないことがあげられる。通常は調査地点へ向かう方法としてGPS受信機を利用するが、今回はコンパスと衛星写真地図、自動車の距離計を使用した。氾濫原の調査では、緑で覆われた農地の中に裸地のテルが突出しているため容易にテルを探すことが可能であったが、ジャバル・ビシュリ方面ではテルに似た自然丘が多く分布していたのと、使用したSPOT衛星画像の撮像時期が2005年と少し古かったため、調査予定地点へ向か



写真2 SPOT衛星画像で遺跡の可能性があると誤判読した裸地（アル・ハウス村）

うことが困難であった。

また、衛星画像の判読では遺跡と読み取った地点が、人工的な裸地であった事例もあり（写真2）、誤判読を避けるために、マルチスペクトルデータを使用した画像分類や、DEMを使用して高さ情報からテルと裸地を分ける必要がある。今後は作成したテル分布図を教師データとして活用するとともに、CORONA・ASTER・ALOS画像から作成した高解像度DEMや各種センサーもあわせて利用し、効率的に遺跡を抽出する方法を確立していきたい。

参考文献

- 木内智康(2007):「表採遺物から見た各遺跡の時代」、Newsletter「セム系部族社会の形成」6, 18-23.
- 長谷川敦章(2007):「ジャバル・ビシュリ周辺における遺跡分布とその立地の歴史的背景:第一次調査成果を中心に」、Newsletter「セム系部族社会の形成」6, 10-17.
- East View Cartographic(2005): Russian Military Mapping, East View Cartographic, 118p.
- U.S.Army(1958): Soviet Topographic Map Symbols, Technical Manual 30-548 U.S. Government Printing Office, Washington, D.C., 102p.

西アジアにおける初期騎馬遊牧民関係の遺跡を訪ねて

高濱 秀 (金沢大学文学部)

公募研究「北方ユーラシア遊牧民部族社会の考古学的研究」研究代表者

1 はじめに

今年度、我々の班では、イラン、トルコ、シリアにおいて、遊牧民に関する遺跡、遺物の調査を実施した。直接の関心の対象は、紀元前8～7世紀に西アジアに現れたキンメリオイとスキタイであるが、それとほぼ同時期のウラルトゥや、イランの後期青銅器時代から初期鉄器時代の遺跡をも訪れた。総勢7人で8月9日に出発して、イランのテヘランに入り、イランの西北部、ウルミア湖周辺を回って、陸路でトルコに入り、ウラルトゥの遺跡や、アンカラ、イスタンブルの博物館を見学した。その後、川又、雪嶋、畠山の3名は、テヘランを経て帰路についた。高濱、林、松原、柳生の4人はシリアに入り、パルミラを経てラッカに到り、調査はすでに終わっていたが、ガーネムアリなどのビシュリ山系の遺跡を見学した。そのほかラッカを基地としてマリ、テル・タバ、テル・ハラフ、デイル・エッソルの博物館などを見学してから、ダマスカス、テヘランを経由して日本へ帰った。

以下に全体の日程を略述し、訪れた遺跡、博物館を列挙する。その後、普通訪れる機会が比較的少なく、我々も特に興味を持って見学したイラン北西部の遺跡見学について、もう少し詳しく述べておきたい。

2 全体の日程

8月9日	成田出発。テヘラン到着。	8月17日	オルミーエ発。セロを通過してトルコへ国境越え。ヴァン着。
8月10日	イラン考古学博物館、アーブギーネ博物館見学。	8月18日	ヴァン・カレ、カブ見学。
8月11日	テヘラン出発。ジャラリエ、マルリク、ガレクティ遺跡見学。ラシュト着。	8月19日	チャヴシュ・テペ、アヤニス、ヨンジャ・テペ見学。
8月12日	ラシュト発。メシュキン・シャフル見学後、タブリーズ着。	8月20日	ヴァン発。アンカラ着。ローマ風呂遺跡、アウグストゥス神殿など見学。
8月13日	バスタム遺跡見学。	8月21日	アナトリア文明博物館、ゴルディオン遺跡見学。
8月14日	アゼルバイジャン博物館、ブルー・モスク遺跡博物館見学。タブリーズ発。ヤニク・テペ、ハサンル遺跡見学。マハバード着。	8月22日	(高濱等4人)アンカラ発。イスタンブール着。軍事博物館見学。 (川又等3人)カマン・カレ・ホユック見学。
8月15日	ジヴィエ遺跡見学。	8月23日	(高濱等4人)トプカプ、アヤソフィア、地下宮殿、城壁など見学。 (川又等3人)アンカラ発。イスタンブール着。トプカプ、アヤソフィアなど見学。
8月16日	マハバード発。ディンハ・テペ見学。オルミーエ着。博物館見学。ギョイ・テ	8月24日	オリエン特博物館、考古学博物館、モザイク博物館見学。
		8月25日	(高濱等4人)イスタンブール発。ダマスカス着。国立博物館見学。 (川又等3人)サドベルク・ハヌム博物館見学。
		8月26日	(高濱等4人)ダマスカス発。パルミラ着。パルミラ遺跡見学。 (川又等3人)軍事博物館、考古学博物館見学。イスタンブール発。テヘラン着。
		8月27日	(高濱等4人)パルミラ遺跡見学。パルミラ発。ルサファ遺跡見学。ラッカ着。 (川又等3人)イラン考古学博物館見学。
		8月28日	(高濱等4人)テル・ハラフ、テル・タバ、見学。 (川又等3人)テペ・シアルク見学。
		8月29日	(高濱等4人)ガーネムアリ、ビール・スバイ、ルジュン・ヘダージェ遺跡見学。 (川又等3人)アーブギーネ博物館、レザー・アッパシ美術館見学。テヘラン発。
		8月30日	(高濱等4人)デイル・エッソル博物館、

- マリ、ドゥラ・エウロポス遺跡見学。
（川又等3人）成田着。
- 8月31日 （高浜等4人、以下同じ）ラッカ発。アルスランタシュ遺跡見学。アレppo着。
- 9月1日 アインダーラ、カラートサマーン遺跡見学。
- 9月2日 アレppo発。アパメア遺跡見学。ダマスカス着。
- 9月3日 ボスラ、スウェイダ、カナワト、シャフバ遺跡見学。ダマスカス発。テヘラン着。
- 9月4日 イラン考古学博物館、レザー・アッバシ美術館見学。
- 9月5日 ゴレスタン王宮博物館見学。テヘラン発。
- 9月6日 成田着。

3 イラン西北部の調査

先にも述べたように、8月11日に、我々は、テヘランを出発してデーラマン地方の遺跡を訪れた。その後タブリーズに出て、オルミーエ湖周辺の遺跡を巡った。8月17日には、オルミーエから陸路国境を越えてトルコのヴァンに入り、続いてヴァン・カレシ、チャヴシュ・テペ、アヤニスなどのウラルトゥの遺跡を訪れた。以下が11日から16日までの調査日記である。

8月11日

テヘランのフェルドゥシ・グラント・ホテルを午前5時に発して、イラン西北部へ向かう。旅行社から、日本語のできる通訳・案内人ダルビー氏をつけてもらった。彼は以前に4年間茨城県にいたそうで、かなり日本語ができる。

ダルビー氏は、かねての知り合いであるギーラーン州の文化財担当者ジャハニ氏に連絡を取り、ギーラーンの遺跡見学に同行してもらうことにした。彼は次に述べる日本隊のジャラリエ・テペの発掘にも参加した人である。彼はロスタマバードから我々のミニバスに乗ってきた。

10時、ジャラリエ・テペ到着。この遺跡は現在九州の筑紫女学園大学に勤務する大津忠彦氏、東京文化財研究所の山内和也氏、中近東文化センターの足立拓朗氏などによって調査された遺跡である(図1)。この地域では墓は多く発見されているが、テペは珍しいということで注目された。ジャラリエ・テペは、以前のハッケミー氏などの報告では、キアルラズと呼ばれていた遺跡の一つである。テペの下地点では、旧石器が発見されているという。テペの上には、発掘し

たトレンチがまだ残っており、日本隊の調査の跡を見ることができた。10時半出発。

11時、マルリク到着。これは1960年代初めにイランの考古学者ネガバンによって調査された墓地遺跡である(図2)。金製杯など豪華な副葬品が多く出土したことでよく知られている。マルリクは小さな山で、墓地はその頂上にあつた。多数の穴が見られたが、発掘の後にも盗掘が多く行われたらしく、元来の墓はほとんど分からない。しかし1基だけ、壁に石積みのある墓を見ることができた。ジャハニ氏によると、マルリクは鉄器時代の遺跡であるという。報告書によると、確かに鉄製の剣身や槍先と考えられるものも発見されている。11時40分出発。

次に訪れたのはガレクティである(図3)。マルリク・テペからガレクティは、距離としては遠くないが、直接行くのは困難である。一旦サンギアルまで行ってから、また南の方へ回っていくことになる。その途中は霧と小雨に包まれていたが、エスペリからガレクティに着くと、雨は上がっていた。ここは江上波夫先生の率いる東京大学の調査団が調査した遺跡で、テル・サラサートなどと共に、日本隊が西アジアにおいて最も早い時期に発掘した遺跡の一つである。15時半頃



図1 ジャラリエ



図2 マルリク



図3 ガレクティ（3号丘から1, 2号丘を見る）



図4 シャーリエリ



図5 シャーリエリの石人

着し、ミニバスを降りて15分ほど歩くと、ガレクティの3号丘、2号丘、1号丘、4号丘が並んでいるのが見えた。発掘された1号丘、2号丘でも穴は多数あいているが、元来の墓がどれであったか分からない。

東大の調査団の発掘した遺跡は、この付近に多くあるが、時間の関係でガレクティだけしか訪れることは出来なかった。17時出発。

この日の宿泊はラシュトである。帰路の途中ラヒジャンでジャハニ氏と別れた。この日見学した遺跡に、迷わずに行くことが出来たのは、氏のおかげである。

19時50分頃、ラシュトに着いて夕食。20時50分、カドゥース・ホテルに投宿した。

8月12日

7時半過ぎ出発。8時半少し前にカスピ海岸に達し、バンダレ・アンザリーを通過してカスピ海に沿って西行し、北上する。この辺はキリムの産地でもあり、キリムを乾しているのが随所に見られた。アスタラの手前から西へ、山地に入っていく。通る道から谷を隔てた向こう側はアゼルバイジャンである。国境は撮影禁止とのこと。小雨が降り、道端では蜂蜜を売っていた。山を上りきると高原となる。13時にアルデビルに着き、昼食。このレストランはキョフテが有名である。串の周りに機械によって挽肉を付けるのが面白い。メシュキン・シャフルへ到達して遺跡を探す。シャーリエリ

遺跡(アルジャグ・カレ)発見。ここは広い面積の特異な遺跡である。1カ所には400体以上の石人が並んでいる(図4、5)。なかには三日月形の柄頭を持ち鞘の先端がU字状に曲がった剣を帯に挿しているものもある。墓と思われる石室も近くに4基ほどある。また石壘が長く続く場所も数カ所あるが、城壁と考えるには低過ぎる。

21時過ぎタブリーズに到着。夕食後ゴスタレシュ・ホテルに泊まる。

8月13日

8時半出発。11時40分、バスタム遺跡へ到着。これはドイツ考古学研究所によって1960年代末頃から10年ほどかけて発掘されたウラルトゥの城砦址である(図6)。その主な年代は前7世紀で、ルサ 世の碑文が発見されている。おそらくイランでは最も大規模なウラルトゥの遺跡であろう。前590年頃メディアにより滅ばされたと考えられている。南北約800メートルの急峻な岩山の東斜面に、へばりつくように建設されたもので、随所に城壁や石積みの遺構が残っている。南側の入り口から入り、13時15分北側の最も高いところへ到達した。高さは海拔1340m、周囲との比高差は200mあった。下に降りて遺跡全景を撮影してから、14時50分出発。上り下りにくたびれはしたが、ほぼ独立した険しい山の上に城を築くというウラルトゥ人の

好みを如実に知ることができた。このような彼らの性向を後にトルコのヴァン・カレシやチャヴシュ・テペでも体験することになる。15時頃カレ・ジャエディーンで昼食をとる。19時頃、タブリーズのホテルへ帰還。21時頃、エルゴリ公園の池の中のレストランで夕食。



図6 バスタム

8月14日

8時出発。タブリーズのアゼルバイジャン博物館見学。多くの土器や青銅器、金銀器が陳列されているが、発掘品や出土地のはっきりしたものは少ない。1階はササン朝時代くらいまで、2階はそれ以後の工芸品やコインなどである。庭には石彫などが並んでいる。2階には中国の陶磁器も展示されているが、それはアルデビルから持ってきたものと聞いた。その後、博物館の館長に案内されて、すぐ近くのブルーモスク博物館を見学した。これはアゼルバイジャン博物館の傍らにあるブルーモスクの隣に、デパートを建設する際に発見された鉄器時代の墓地である。8年前に発見され調査されていたが、2ヶ月前から遺跡博物館として開館した。墓が発掘され、人骨と副葬品が出土したままの状態で見学されている。日本人では最初の観客だそうである。ここの出土品の一部はアゼルバイジャン博物館にも、墓を復元した形で展示されている。

二つの博物館を見学後、10時半頃タブリーズを出発して、1時間ほどでヤニク・テペに到着。大きなテペである。赤色や黒色の土器片の散布は見られたが、表面から遺構は見えず、発掘された痕跡も判然としなかった。12時15分出発。

13時頃アザル・シャフルで昼食を取ってから、16時40分ハサンルー着。ハサンルーはいうまでもなく、アメリカのペンシルヴェニア大学博物館などによって発



図7 ハサンルー

掘され、イラン西北部の標準遺跡と見做すべき遺跡である(図7)。ハサンルー 期の火災に遭った建物は特に有名で、そこから発見された金製の鉢はよく知られている。マンナイの遺跡とされており、イラン西北部の青銅器時代から鉄器時代の状況を知るために最も重要な遺跡といってよい。特にハサンルー 期からは3つ孔のある銜留が出土しているが、ある程度類似した銜留が南ロシアなどで発見されており、その関連が気になるところである。また 期からは、動物紋様で飾られた銜留が出土している。これも、スキタイの動物紋様との関係で捉えられる。残念なことにこれらの時期に関する正式の発掘報告はまだ刊行されていない。

有名な焼失建物の壁などには土が塗られて保存されていた。聞くと、それは1月前に塗り直されたもので、1年に1~2回塗り直しているという。18時20分帰途に就く。

19時過ぎ、マハーバードのクイエスタン・ホテル着。マハーバードはこのクルド地方における中心地である。町を歩いている人のなかにも、だぶだぶのズボンと帯など、クルド人特有の服装をしている人が多い。

8月15日

8時ごろ出発。9時頃ブカン、10時頃サッケズの町を通過。11時、ジヴィエ遺跡到着。サッケズの東方33kmほどになる(図8)。



図8 ジヴィエ



図9 デインハ・テペ

ここでは1946年に、金銀製品や象牙製品が墓から発見されたという。これが有名なジヴィエ遺宝あるいはサッケズ遺宝である。ジヴィエ出土品といわれるものは、世界の幾つかの博物館や個人コレクションに収蔵されているが、科学的な発掘を経た品々ではないので、どれが確実にジヴィエから出土したかを知るのは極めて困難である。なかには、偽物も混じっていると考えられている。

「ジヴィエ遺宝」のなかには、スキタイの動物紋様と似たものを表わしたものがあり、スキタイの最も古い遺物と考えられたことがある。西アジアにおけるスキタイの動向を考える上に、我々としては最も訪れたい遺跡であった。

ジヴィエ遺跡は独立した小さな山であり、北東側から上っていくと、日乾し煉瓦で作られた建物の遺構がある。これは発掘後、煉瓦の上に土を塗って保存しているものらしい。敷石による階段がさらに上のほうへ続いていく。その両側に煉瓦の壁の跡があり、中途にもまた煉瓦作りの遺構がある。階段の敷石所に、両側に円形の石が配置されたところがある。礎石のように見えるが、門のような遺構があったのであろうか。上には細長い形の平らな広いテラス状の場所があり、2列になった円形の礎石が所々に見える。このホール的一方は下を見下ろし、一方は煉瓦で築かれた壁で区切られている。壁の向こうがこの遺跡の最高所である。

13時過ぎに遺跡を出発、14時過ぎにサッケズで昼食をとる。約1時間後に出発し、17時近くにホテルへ帰着。

8月16日

8時過ぎマハーバードを出発してデインハ・テペを目指す。9時頃、ナカデの近くの道路のロータリーで、ハサンルー出土の金製碗の形を柱の上に付けたものを見つけた。面白がって皆で撮影した。探すのに時間が掛かったが、ようやく11時20分デインハ・テペに到着。

高さはあまり高くないが、東西に長い大きなテペである(図9)。北側は川に面している。ところどころに盗掘坑のようなものはあるが、発掘した跡は現在では分からない。西側の端のほうに土壁が残っていたが、その時期は不明。12時10分出発。

14時20分頃、オルミーエに到着し昼食。16時頃からオルミーエの博物館を見学。ウラルトゥの碑文や、ブカン出土の彩釉煉瓦などがあった。ここに陳列されているような彩釉煉瓦は日本にも幾つか齎されている。ほかにルリスタン青銅器や、他の地域の先史土器なども陳列されていた。

17時20分、博物館の見学を終了し、ギョイ・テペに行く。これは町の少し南で、オルミーエ湖に近いところにあった。現在かなりの部分がアルメニア人のキリスト教徒の墓地で覆われていたが、彼らは既にここに住んでおらず、テペの隣にあった教会は廃墟になり、モスクが建っていた。

オルミーエ湖はかなり縮小していた。塩湖なので、遠浅の干上がった部分は塩で覆われている。水浴をしている人はいたが、干上がった部分は残念ながらあまりきれいではなく、我々は水遊びをする気にはなれなかった。

4 結びにかえて

今回、スキタイが活動したと考えられる地を巡ることができたのは、我々にとってすこぶる有益であった。特に、ジヴィエやハサンルーは、スキタイの動物紋様に関連する重要な遺物が出土した遺跡である。それらの遺構において、石積みの上に日乾し煉瓦を積んで築かれた壁などを実際に見ることができた。またウラルトゥの遺跡を4ヵ所実見し、その立地、石積み、そして建築の特徴などをある程度了解することができたのも、大きな収穫である。この度得た知見をこれからの研究に生かしていきたいと思う。

事務局だより

現在、総括班と6つの計画研究班の連携により第4次現地調査がおこなわれています。

ニュースレター本号は、桂田祐介（計画研究「環境地質学、環境学、14C年代測定にもとづくユーフラテス河中流域の環境変遷史」研究分担者）、深見奈緒子（計画研究「古代西アジア建築における組積技術の形態と系譜に関する研究」研究分担者）、宮下佐江子（計画研究「オアシス都市パルミラにおけるビシュリ山系セム系部族文化の基層構造と再編」研究代表者）、後藤智哉・長谷川均（計画研究「西アジアにおける考古遺跡のデータベース化の研究」研究協力者・研究分担者）、高濱秀（公募研究「北方ユーラシア遊牧民部族社会の考古学的研究」研究代表者）の6氏の論考で構成されています。

これらの多くは現地調査の成果の報告で、研究の成果を速報するというニュースレター本来の役割を果たしていると思います。

今後も、シリア現地調査、あるいは、国内・外関連研究のいずれであれ、研究の成果を速やかに掲載していきたいと思えます。

（大沼克彦）

Newsletter 「セム系部族社会の形成」 No.8 2007年11月30日発行

発行： 文部科学省科学研究費補助金「特定領域研究」
「セム系部族社会の形成 ユーフラテス河中流域ビシュリ山系の総合研究」
代表 大沼克彦

編集：総括班（大沼克彦・藤井純夫・西秋良宏・常木 晃・宮下佐江子・佐藤宏之）
事務局：〒195-8550 東京都町田市広袴1-1-1国土館大学イラク古代文化研究所内 大沼研究室
Tel：042-736-5489 Fax：042-736-5482 E-mail：kaonuma@kokushikan.ac.jp
ホームページ：http://homepage.kokushikan.ac.jp/kaonuma/tokuteiryouiki/index.html

